

令和元年度指定
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」
(地域魅力化型)

令和2年度 研究開発実施報告書 【第2年次】



埼玉県立小川高等学校

巻 頭 言

「おがわ学」は未来を切り拓く学び

埼玉県立小川高等学校長 荻塚 雄一

ICT 技術の急速な進展、少子高齢化、温暖化に伴う地球規模の気候変動など、私たちの社会は大きな転換点にあります。未来を生きる子どもたちにとって、こうした変化の時代を生き抜くことのできる力の育成が喫緊の課題です。そして、それは同時に、地域を支え地域社会をよりよい方向へ発展させるための力の育成でもあります。

私たちの小川町には、美しい里山や清流などの豊かな自然、長い歴史と伝統に育まれた文化、細川紙と小川和紙など先人の知恵を生かした様々な産業や技術など、学ぶべき教育資源が豊富にあります。「おがわ学」は、こうした地域の教育資源を活用した探究的な学びによって、生徒の未来を切り拓く力を育成する学びです。具体的には「自ら課題を発見し、深く考え、主体的に判断することができる生徒」、「小川町に対して愛着や誇りを持ち、小川町を含む地域に深く関われる生徒」「多様な人々と協働し、課題の解決に取り組むことができる生徒」の育成を目指しています。

「おがわ学」は、小川町、小川町教育委員会、町内の小中学校と小川高校、地域住民の皆様、地元産業界などから構成されるコンソーシアムによって運営されています。コンソーシアムでは、「つながろう小川! 知る! 学ぶ!! 活かす!!!」をスローガンとして掲げました。「小学校・中学校・高校がつながる」「地域と学校がつながる」「過去、現在、未来がつながる」などの思いを込めたスローガンです。また、この思いを実現するために、学んだことを地域のために「活かす」、自分自身の将来や生き方に「活かす」ことを目指しています。「おがわ学」は、地域への愛着や誇りを育むと共に、学びを通じて地域創生に寄与する取組でもあります。

二年目となる今年は、こうした「おがわ学」の崇高な理念を実践する挑戦の一年でした。越えるべきハードルは2つありました。一つは、小川町の教育資源の何をどう教材化するのか。もう一つは、探究的な学びをどう実践して生徒の未来を切り拓く力を育成するのか。

一つ目の地域の教育資源の教材化については、①小川町には教材となるどんな資源があるのか、②各教科の目標等に照らして、どう授業計画に位置付けるか、③実際の授業展開に地域の方を講師として招く際、その方の有する経験や知識と授業のねらいをどうすり合わせるか、などが課題となりました。私たち教員にとって、教科書をもとに授業を実践することには慣れていますが、ゼロから授業を創り上げるのは初めての経験でした。特に③については、地域連携コーディネーターの存在がとても大切であると思われまます。地域に人的ネットワークを持ち地域に根ざすと同時に、学校サイドのニーズや教育の論理に精通することが求められます。

二つ目の探究的な学びの実践については、まさに新しい学習指導要領の先行的な実践という意味を持ちます。コンソーシアムのスローガンの通り、小川町の歴史や文化、自然、産業などを「知る」こと、そこから見出された事象や課題について考える（「学ぶ」）こと、そして、学んだことを自分自身の将来や地域の将来に「活かす」こと、こうした学びのプロセスにチャレンジしました。

これら二つのハードルは、まだ十分に越えられたわけではありません。ハードルの高さを思い知らされた一年だったともいえましよう。他方で、大きな成果のあった一年だったことを実感しています。一月の末、ある三年生の生徒が校長室に来てくれました。「おがわ学で知った小川町の先進的な有機農業を更に学びたい。そして、それを自分の将来に生かし、地域の発展に貢献したい。」との言葉に続き、地域の課題解決と自分の生き方について、笑顔でそれまで考えてきたことたくさん聞かせてくれました。

今後も「おがわ学」は、多くの人々の願いや思いを結集しながら、試行錯誤の中でよりよいものに改善され、バージョンアップされていきます。「おがわ学」を通じて成長する生徒たちの笑顔を信じ、「おがわ学」に関わるみんなの力で「おがわ学」を推進したいと思ひます。これまで、埼玉県教育委員会、小川町、小川町教育委員会、地域住民の皆様をはじめ、関係の皆様から手厚いご指導とご助言をいただきながら研究・実践を推進してまいりました。あらためて深く感謝申し上げますと共に、本報告書への忌憚のないご意見や今後の更なるご指導、ご支援を賜りますようお願いして、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

目次

巻頭言	1
目次	2
I 研究開発概要	3
1 研究開発実施計画書	3
2 研究開発実施報告書	9
3 関連資料	19
II 研究開発会議報告	21
1 構想委員会報告	21
2 担当者会議報告	21
3 推進協議会報告	22
4 運営指導委員会報告	23
III 実施科目報告	25
1 地理A	25
2 世界史A・B	26
3 生物基礎	30
4 美術II	33
5 美術III	35
6 コミュニケーション英語I	38
7 総合的な学習の時間「日本文化研究」	38
8 総合的な学習の時間「総合歴史研究」	42
9 総合的な学習の時間「くらしと科学」	46
10 総合的な学習の時間「健康と運動」	50
11 総合的な学習の時間「音楽演奏研究」	51
12 総合的な学習の時間「生活と美術」	54
13 総合的な学習の時間「総合英語研究」	57
IV 研修会報告	63
1 新たな学び場のデザインに向けての学校と地域との連携	63
2 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット	64
V 研究成果発表	65
1 埼玉県教育長視察	65
2 文部科学省視察	66
3 埼玉県知事訪問	66
4 おがわ学フォーラム	67
5 「おがわ学」生徒作品展	68
VI 成果と課題	69
1 本年度の成果	69
2 次年度の課題	69

I 研究開発概要

1 研究開発実施計画書

(1) 指定校名・類型

学校名 埼玉県立小川高等学校
学校長名 荻塚 雄一
類型 地域魅力化型

(2) 研究開発名

「おがわ学の構築・実践」学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト

(3) 研究開発の概要

県立小川高等学校と小川町の小中学校の児童生徒が、発達段階に応じて地域の文化や歴史、産業等を学び、地域へ参画し、地域課題の解決に取り組む学びである「おがわ学」を構築し、総合的な探究の時間や各教科の中で横断的に活用していく。

(4) 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用

- ア 学校設定教科・科目を開設していない
- イ 教育課程の特例の活用していない

(5) 事業の実施期間

契約日～令和3年3月31日

(6) 令和2年度の研究開発実施計画

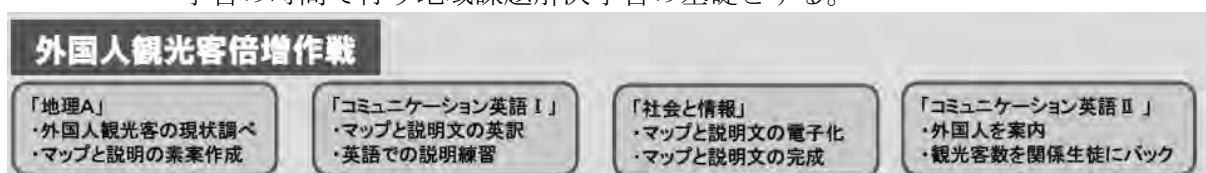
- ・各教科への「おがわ学」の導入内容の検討

ア 研究開発の中心

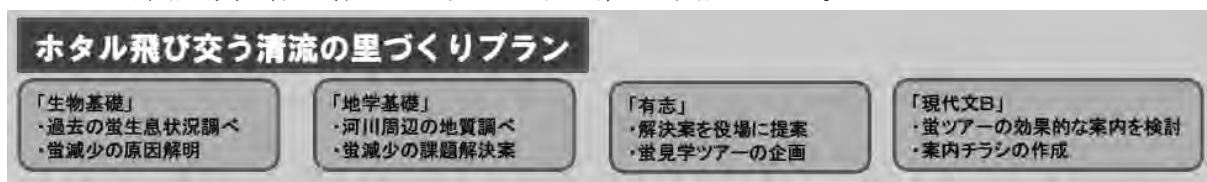
「教科横断の3つの取組」に示す『外国人観光客倍増作戦』『ホテル飛び交う清流の里づくりプラン』『伝統を生かした未来の和紙商品販売開発プロジェクト』に関わる各教科での探究的な学び。

イ 系統性・構造的性

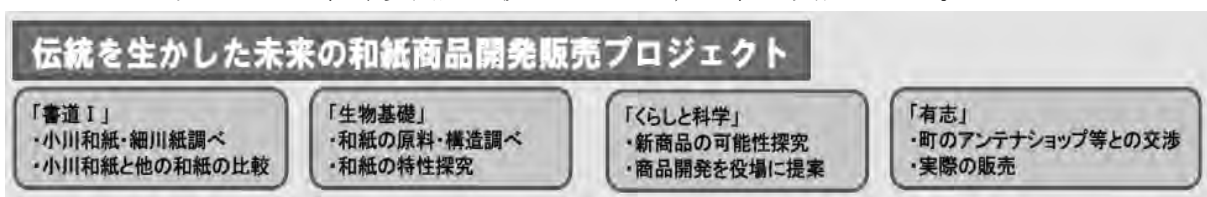
小・中学校で学んだ「おがわ学」との系統性を踏まえ、小川町を支える「産業」「自然」「歴史」の視点から、地域課題の解決に向けた「教科横断の3つの取組」を進めていく。各教科で探究学習を積み重ねながら、教科にとらわれない「教科横断の3つの取組」を行う構造である。そして、3年生の総合的な学習の時間で行う地域課題解決学習の基礎とする。



『外国人観光客倍増作戦』では、地域の史跡や施設などの観光地をいかに情報収集し整理できるか、どうすれば分かりやすく外国語化できるか、情報機器を活用して発信力を高めるにはどのような工夫をすればよいか等を考えさせ、外国人観光客の増加という町の課題解決に貢献させる。



『ホテル飛び交う清流の里づくりプラン』は、蛍の生息条件等を調べることから始まり、なぜ数十年間で町から蛍が減少したのか、環境や産業構造の変化が地質やそこに住む生物たちにどのような影響を与えたのか、フィールドワークを交えながら、環境問題の視点から町の魅力化に貢献させる。



『伝統を生かした未来の和紙商品販売開発プロジェクト』は、小川町の伝統である和紙を未来に受け継いでいくために、和紙が生産されるようになった背景等を調べ、時代によって和紙がどのように活用されていったかを知り、未来にはどのような形で活用されるのかを提案させる。

ウ 年間指導計画の概要

生徒が探究学習を通して、自ら課題意識を持ち、その意識を連続発展させていくことを重視する指導計画である。この指導計画では、生徒が探究の過程を繰り返していく中で、新たな疑問や課題が生まれ、それを解決するための新たな取組が生まれることも期待できる計画となっている。以下が具体的な内容である。

- ・ポンチ絵の「3つの取組」を教科の年間指導計画の中に組み入れる。
- ・1つの取組は4つのブロックで構成されている。
- ・1つのブロックの中で探究の過程を進めていく。
- ・1つのブロックにかける時間数は2～8時間程度。
- ・ブロックごとの探究活動を繰り返し、組み合わせることで教科横断的な探究学習となり、「3つの取組」の課題解決に向けた取り組みとなる。
- ・年度末には、取組の成果を地域に発表する成果報告会を実施する。
- ・1、2年年次を中心とした「3つの取組」を踏まえ、3年次の総合的な学習の時間（3単位）で取り組んでいく計画である。

エ 指導方法や指導体制

- ・「おがわ学」の目指す児童生徒像を実現していくため、学校全体で探究学習に取り組む。そして、地域全体で「おがわ学」で育成する10の力（「おがわ学」で育成する資質・能力）を身に付けさせる。

- 各教科の授業において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を意識し、課題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動を行っていく。また、「おがわ学」の授業では、振り返りシート等を活用し、探究学習における学びの姿や生徒の成長をポートフォリオ化し、生徒、教員間で共有していく。
- 教育課程内での取組は、教科担当が行うが、必要に応じて地域の力を活用して探究学習を行う。ただし、すべての取組で、探究したことを実際に町に還元するために放課後や土曜日・日曜日に活動する場面があるので、その部分に限っては教育課程外での指導となり、引率する部活動顧問や生徒会顧問等と連携をとりながら進めていく。また、地域の方々と連携・協働する指導体制づくりを行う。

つながろう小川 知る！学ぶ！！活かす！！			
目指す 児童・生徒像	自ら課題を発見し、深く考え、主体的に判断することができる児童・生徒		
	小川町に対して愛着や誇りを持ち、小川町を含む地域に深く関われる児童・生徒		
	多様な人々と協働し、課題の解決に取り組むことができる児童・生徒		
育成する 資質・能力の3つの柱	知識及び技能	思考力,判断力,表現力等	学びに向かう力, 人間性等
	知る力	学ぶ力	活かす力
「おがわ学」で 育成する 10の力	【観察力】 物事の細部をじっくり見ることができる 【分析力】 資料等を客観的に読み解くことができる 【傾聴力】 他者の意見を謙虚に聞くことができる	【疑問力】 物事の課題に気づくことができる 【思考力】 筋道を立て整理しながら考え進めることができる 【判断力】 根拠を持って、物事の取捨選択を行うことができる 【表現力】 思考した結果を論理的に表現し、分かりやすく他者に伝えることができる	【行動力】 自身の考えに基づき、失敗を恐れず、粘り強く物事に取り組むことができる 【協働力】 多様な人々と、物事を円滑に進めることができる 【創造力】 課題解決の方法や納得解、新たな価値を作り出すことができる

オ 学習の評価計画

- 「おがわ学」の目指す児童生徒像から、育成する資質・能力として、10の力を設定し、「おがわ学」の授業を通して、10の力を育成していく。また、学年ごとに育成する資質・能力のルーブリックを作成し、評価していく。
- 各授業の中では、「プレゼンテーションやポスター発表などの表現による評価」「討論や質疑の様子などの言語活動の記録による評価」「学習や活動の状況など観察記録による評価」「論文・報告書、レポート、ノート、作品などの制作物、それらを計画的に集積したポートフォリオによる評価」「課題設定や課題解決能力をみるような記述テストの結果による評価」「評価カードや学習記録などによる生徒の自己評価や相互評価」「保護者や地域社会の人々等による第三者評価」等を行い、生徒の学びの過程を多面的な視点から評価する計画である。

また個に応じた指導を充実していくために、ルーブリックの設定や振り返りシートの活用、相互評価、自己評価等の形成的評価を進めていく。そして、形成的評価を積み重ねて総括的評価とする計画である。

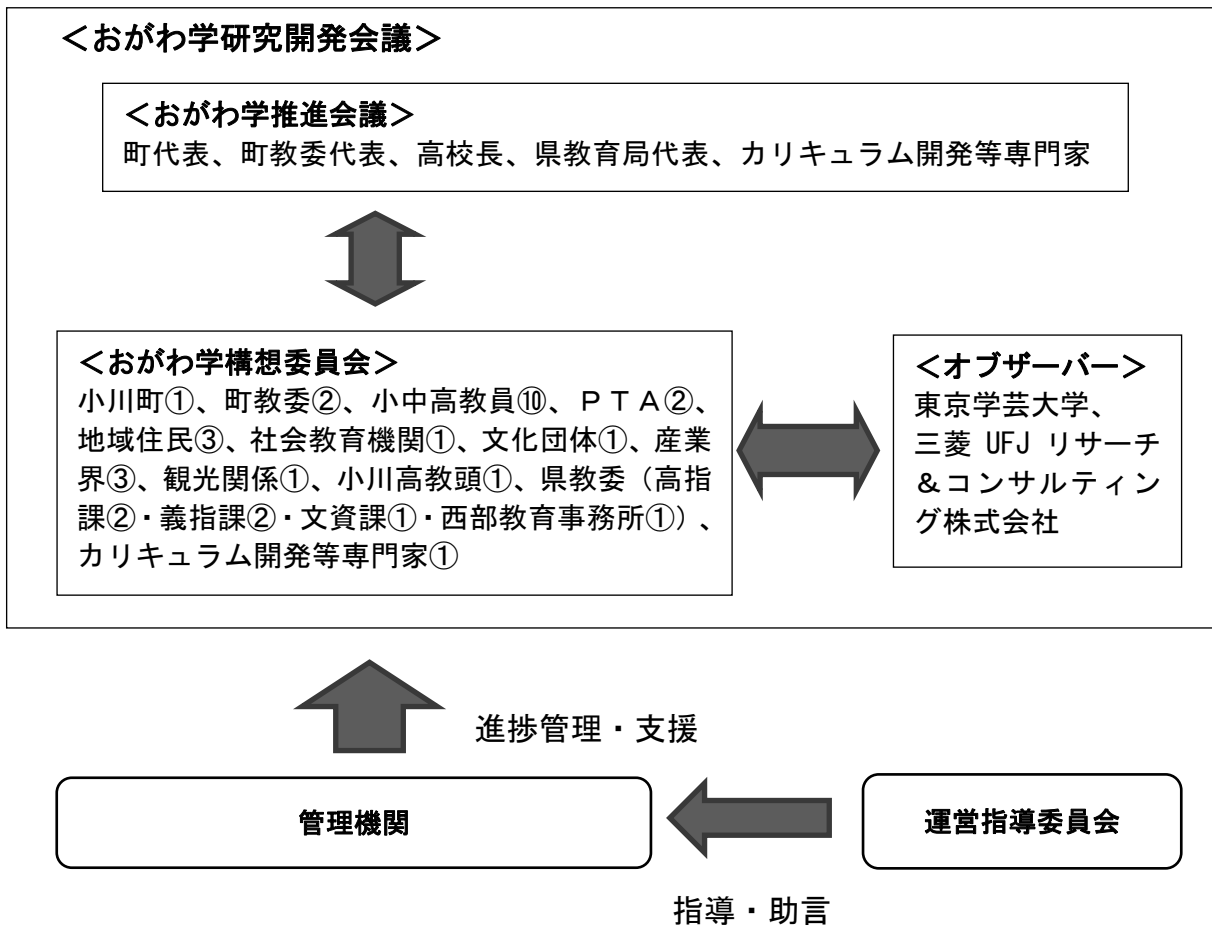
(7) 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
「おがわ学」の 内容の調査・研究	埼玉県立小川高等学校 小川町役場 その他	おがわ学構想委員会委員長
探究的な学びに関する 研究及び実践	埼玉県立小川高等学校 小川町役場 小川町立東中学校 小川町立西中学校 小川町立櫛台中学校 その他	おがわ学構想委員会委員長
他県の優秀な取組の横 展開への検討・実施	埼玉県立小川高等学校 小川町役場	おがわ学構想委員会委員長
小川高校生の状況に 応じた内容の実践	埼玉県立小川高等学校 小川町役場 その他	おがわ学構想委員会委員長
小川町立小中学校での 教育に応じた内容の 検討及び実践	小川町役場 小川町立東中学校 小川町立西中学校 小川町立櫛台中学校 その他	おがわ学構想委員会委員長
評価の検討	埼玉県立小川高等学校 小川町立東中学校 小川町立西中学校 小川町立櫛台中学校 その他	おがわ学構想委員会委員長 および 地域連携委員会委員長

運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
空閑 厚樹	立教大学コミュニティ福祉学部教授	有識者
若江 真紀	株式会社キャリアリンク代表取締役	産業界
竹田 育子	島根県立高校教諭	先進県
浅沼 俊英	西部教育事務所長	教育関係者
森 孝	埼玉県企画財政部地域振興センター 東松山事務所長	地域振興

※備考欄には、学校教育に専門的知識を有する者、学識経験者、関係行政機関の職員等、運営に関して指導・助言にあたる専門の区分を記入すること



機関名	機関の代表者名
埼玉県教育委員会 高校教育指導課（教育課程担当） 義務教育指導課（教育指導担当） 西部教育事務所 文化資源課	教育長 小松弥生 2名 2名 1名 1名
小川町 政策推進課 小川町教育委員会（小中学校教員含む） 学校教育課 小川町立小学校6校 小川町立中学校3校 地域住民 PTA 社会教育機関	町長 松本恒夫 2名 教育長 小林和夫 2名 6名 3名 3名 2名 町立図書館長
埼玉県立小川高等学校	校長 葺塚 雄一 教頭 教諭
ホンダ・・・産業界 町商工会（松岡醸造）・・・産業界	1名 1名

有機農業生産グループ・・・産業界	1名
細川紙技術者協会・・・文化	1名
東武トップツアーズ・・・観光	1名
コーディネーター	佐藤 夏子
※東京学芸大学	1名
※三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社	2名

※はオブザーバーとして参画

カリキュラム開発専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	佐藤 夏子	埼玉県	会計年度任用職員
海外交流アドバイザー			
地域協働学習実施支援員	佐藤 夏子	埼玉県	会計年度任用職員

(8) 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間 (契約締結日～令和3年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「おがわ学」の内容の調査・研究	—————→											
探究的な学びに関する研究及び実践	—————→											
他県の取組の横展開への検討・実施→				—————→							
高校生の状況に応じた内容の実践	—————→											
小中学校での教育に応じた内容の検討及び実践→			—————→								
評価の検討	—————→											

2 研究開発実施報告書

令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発の実施状況を、下記のとおり報告します。

(1) 事業の実施期間

令和2年4月20日 ～ 令和3年3月31日

(2) 指定校名・類型

学校名 埼玉県立小川高等学校

学校長名 葦塚雄一

類型 地域魅力化型

(3) 研究開発名

「おがわ学の構築・実践」学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト

(4) 研究開発概要

小川町の小中学校、県立小川高等学校の児童生徒が、発達段階に応じて地域の文化や歴史、産業等を学び、地域へ参画し、地域課題の解決に取り組む学びである「おがわ学」を構築し、総合的な学習の時間や各教科の中で横断的に活用していく。

(5) 教育課程の特例の活用の有無

無

(6) 管理機関の取組・支援実績

ア. コンソーシアムについて

① コンソーシアムの構成団体

高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
埼玉県教育委員会 高校教育指導課 義務教育指導課 西部教育事務所 文化資源課	教育長：高田 直芳 教育指導幹：鎌田 勝之 指導主事：荻野 あつみ 教育指導幹：加賀谷 徳之 指導主事：浅井 大貴 指導主事：歌代 圭介 指導主事：向井 隆盛
小川町 政策推進課 小川町教育委員会（小中学校教員含む） 学校教育課 小川町立小学校6校 小川町立中学校3校 地域住民	町長：松本 恒夫 課長：矢島富男 主幹：青木 洋 教育長：小林 和夫 課長：下村 治 指導主事：横山 大輔 主任指導主事：田端 隆二 教頭：篠崎和泉 主幹教諭：秦 健太郎 主幹教諭：児玉 暁直 教諭：島野 修次 教諭：馬場 悦子 教諭：葛野 かすみ 教頭：佐藤 毅一郎 教諭：原川 純一 教諭：佐藤 明彦 東洋大学：吉田 善一 地元会社経営者：近藤 嘉則

P T A 社会教育機関	町区長会長：荒井 基明 町P T A連合会（小中）幹事：金田 卓也 高校P T A会長：伊得 浄子 町立図書館長：新田 文子
埼玉県立小川高等学校	校長：葦塚 雄一 教頭：篠田 俊文 教諭：花輪 恵
ホンダ 松岡醸造（町商工会会長） 有機農業生産グループ・・・産業界 細川紙技術者協会・・・文化 東武トップツアーズ・・・観光	ホンダ：圓山 昇 町商工会長：松岡 良治 有機農家関係者：佐藤 和美 細川和紙技術者協会：内村 久子 東武トップツアーズ：望月 康紀
コーディネーター	佐藤 夏子
※東京学芸大学	こども未来研究所：高橋 真生
※三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社	主任研究員：阿部 剛志 副主任研究員：喜多下 悠貴

※はオブザーバーとして参画

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年5月29日(金)	第1回担当者会議 ・委員の委嘱及び今年度の取組について協議
令和2年6月10日(水)	第1回おがわ学構想委員会 ・委員の委嘱及び今年度の取組について確認 ・おがわ学お披露目会（仮称）について協議
令和2年7月1日(水)	第2回担当者会議 ・おがわ学お披露目会の名称及び開催について協議 ・おがわ学テキストの作成方針について協議
令和2年7月22日(水)	第2回おがわ学構想委員会 ・おがわ学お披露目会（仮称）の名称及び開催について協議 ・おがわ学テキスト作成方針について協議 ・おがわ学構想委員会委員との意見交換及び担当者会議の部会設置について
令和2年8月25日(火)	第3回担当者会議 ・おがわ学運営指導委員会報告 ・おがわ学お披露目会（仮称）の名称について協議 ・各部会の進め方について協議 ・「育成を目指す児童生徒の姿」について協議 ・人材バンクについて
令和2年9月16日(水)	第4回担当者会議 ・「おがわ学」に係る授業記録について協議 ・おがわ学テキスト及びリーフレットの作成について協議 ・おがわ学フォーラムについて協議
令和2年9月29日(火)	おがわ学研修会 ・産業能率大学藤岡教授の講演及びワークショップを開催 ・町内関係者及び県内の高等学校や行政関係者が多数出席して、地域学に取り組む意義や意味を共有

令和2年10月8日(木)	第3回構想委員会 ・おがわ学フォーラムの進捗状況及び内容について協議 ・おがわ学テキスト作成の進捗状況について報告 ・リーフレットの内容について協議
令和2年10月23日(金)	第5回担当者会議 ・おがわ学フォーラムおよびテキスト作成について協議
令和2年11月13日(金)	第6回担当者会議 ・おがわ学フォーラムおよびテキスト作成について協議
令和2年11月25日(水)	第7回担当者会議 ・おがわ学フォーラムおよびテキスト作成について協議 ・進捗状況の共有
令和2年12月7日(月)	第4回おがわ学構想委員会 ・おがわ学フォーラムの詳細について協議 ・おがわ学テキストの進捗の確認と完成に向けた意見交換

イ. カリキュラム開発等専門家について

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

埼玉県職員 佐藤夏子（会計年度任用職員として雇用）週2日高等学校で勤務

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年4月17日(月)	令和2年度 授業計画の整理、修正
令和2年5月13日(水)	おがわ学授業づくりについて小川町教育委員会と協議 ・今年度の取組及び計画について ・新型コロナウイルス感染症の対応について
令和2年6月1日(月)	3年生総合的な学習の時間「くらしと科学」の授業について担当教諭と協議 ・和紙学習センターの活用について
令和2年6月3日(水)	第1回おがわ学推進協議会 出席 ・今年度の取組及びスケジュールについて
令和2年6月10日(水)	第1回おがわ学構想委員会における運営 ・今年度の取組及びスケジュールについて
令和2年6月12日(金)	2年生「現代文」の授業に参加 ・オンライン授業視察
令和2年6月15日(月)	3年生総合的な学習の時間「健康と運動」の授業について担当教諭と協議 ・資料作成について
令和2年6月24日(水)	おがわ学の指導計画について担当教諭と協議 ・学校再開後の対応について
令和2年6月30日(火)	高校魅力化アンケートオンライン説明会 参加
令和2年7月13日(月)	第2回おがわ学推進協議会 出席 ・今年度の取組及びスケジュールの変更について
令和2年7月22日(水)	第2回おがわ学構想委員会における運営

	・今年度の取組及スケジュールの変更について
令和2年7月31日(金)	3年生総合的な学習の時間「音楽演奏研究」の授業について担当教諭と協議 ・2学期の授業カリキュラムについて
令和2年8月4日(火)	理科の授業カリキュラムについての協議 ・2学期の授業カリキュラムについて
令和2年8月5日(水)	第1回運営指導委員会 出席 ・今年度の取組及び進捗状況についての指導・助言
令和2年8月19日(水)	地歴科の授業カリキュラムについての協議 ・カリキュラム実施に向けての資料収集について
令和2年9月25日(金)	3年生総合的な学習の時間「くらしと科学」の授業について担当教諭と協議 ・カリキュラムの計画変更及び実施について
令和2年9月25日(金)	第3回おがわ学推進協議会 参加 ・おがわ学フォーラムの進捗状況及び内容について協議
令和2年10月8日(木)	第3回おがわ学構想委員会における運営 ・おがわ学フォーラムの進捗状況及び内容について協議
令和2年11月6日(金)	第2回運営指導委員会 出席 ・授業視察及び進捗状況について委員からの指導助言
令和2年11月19日(木)	文部科学省視察対応 ・世界史授業支援及び取組についての説明

ウ. 地域協働学習実施支援員について

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

埼玉県職員 佐藤 夏子（会計年度任用職員として雇用）

週2日（高等学校及び生涯学習課）勤務

②実施日程・実施内容

地域協働学習実施支援員の活動実績について、具体的に記入すること。

日程	内容
令和2年4月13日(月)	地域連携についての協議 ・今年度の取組について（立教大学 空閑教授）
令和2年5月14日(木)	地域連携についての協議 ・和紙体験センター利用日程及び小川和紙工業協同組合との協力について（にぎわい創出課）
令和2年5月15日(金)	地域連携についての協議 ・イベントの開催について（おいでなせ小川五十嵐氏）
令和2年6月17日(水)	地域連携についての協議 ・町立図書館との連携について（町立図書館新田館長）
令和2年7月9日(木)	地域連携についての協議 ・町内フィールドワークについて（NPO あかりえ谷口氏）
令和2年7月29日(水)	地域連携についての協議

	・町商工会と学校との連携について（町商工会松岡氏）
令和2年7月30日(木)	3年生総合的な学習の時間「総合社会研究」の授業について町政策推進課、担当教諭と協議 ・授業カリキュラム及び2学期の授業計画について
令和2年8月21日(金) ～8月23日(日)	1年生進路行事への同行 ・小川町における進路の探究学習の運営
令和2年8月24日(月)	地域連携についての協議 ・授業での活用について（本田技研工業圓山氏）
令和2年9月4日(金)	3年生総合的な学習の時間「日本文学研究」の授業について町立図書館と協議 ・フィールドワークの実施について (町立図書館新田館長)
令和2年9月9日(水)	3年生総合的な学習の時間「日本文学研究」「総合歴史研究」フィールドワークに同行 (小川町における文学及び歴史に関する探究学習)
令和2年10月22日(木)	1年生進路行事への支援 ・小川町在勤の卒業生へのヒアリング

エ. 運営指導委員会について

①運営指導委員会の構成員

運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
空閑 厚樹	立教大学コミュニティ福祉学部教授	有識者
若江 真紀	株式会社キャリアリンク代表取締役	産業界
萬燈 智子	島根県立高校教諭	先進県
福島 みどり	西部教育事務所長	教育関係者
森 孝	埼玉県川越比企地域振興センター東松山事務所長	地域振興

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年8月5日(水)	第1回運営指導委員会 出席 ・今年度の取組及び進捗状況についての指導助言
令和2年11月6日(金)	第2回運営指導委員会 出席 ・授業視察及び進捗状況についての指導助言

オ. 管理機関における取組について

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

- ・国費に上乗せした独自の支援や取組の実施
- ・継続的な取組を行うための教員の人事面における配慮
- ・構想委員会及び推進協議会の企画、運営
- ・運営指導委員会の企画、運営
- ・職員研修会の企画、運営
- ・町、町教委、高校との定例ミーティングの企画、調整、運営

- ・「おがわ学」の授業支援

②事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・先進校との意見交換、情報収集
- ・ファンドレイジングについての情報収集
- ・コミュニティスクールについての調査・研究

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

- ・なし（前年度小川町と小川高校で連携協定を締結済）

(7) 研究開発の実績

ア. 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間「総合歴史研究」における小川町内での学習						2回	1回					
総合的な学習の時間「日本文化研究」における小川町内での学習				1回		2回	2回					
総合的な学習の時間「総合英語研究」における小川町内での学習						2回	2回					

イ. 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

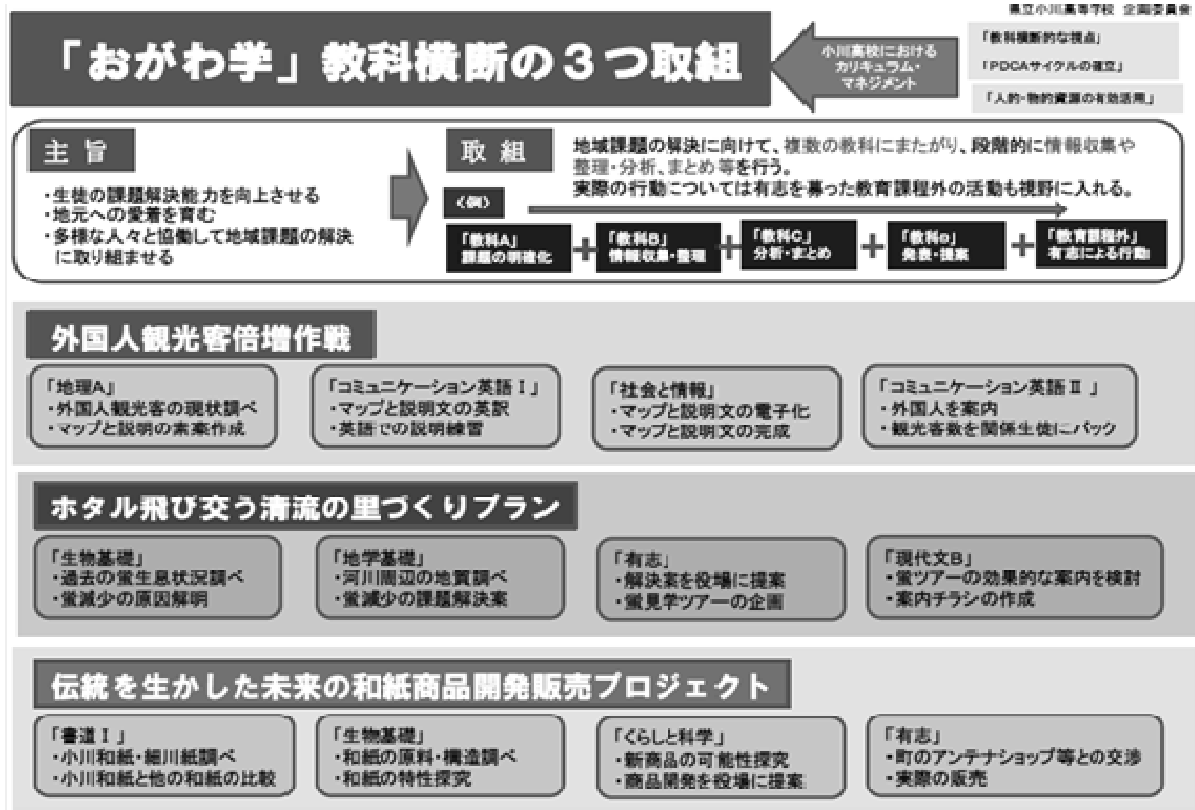
令和元年度に作成したおがわ学指導計画（骨子）を見直し・改善し、「産業」「歴史・文化」「自然」の3つの分野と「和紙」「緑と清流」「町の発展と先端技術」「有機農業」「文化資源」「町の姿」の6つのテーマに沿ったものに整理した。計画したが実施に至らなかったものや計画に入れていなかったが実施できたものもあったが、3つの分野と6つのテーマに沿った地域課題についての教材作成、授業実践を行うことができた。具体的には、少子化・高齢化・人口減少などの町が抱える課題や和紙産業の課題などを取り上げた内容も多かったが、青木テルや仙覚律師などの歴史的偉人や（株）ヤオコーや（株）しまむらなどの地元発祥の企業を取り上げ、先人に倣って新たな課題に挑戦していく態度を育んだり、町の自然や産業を外部にPRし、観光客や移住者を増やそうといった前向きな内容も多かった。

② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

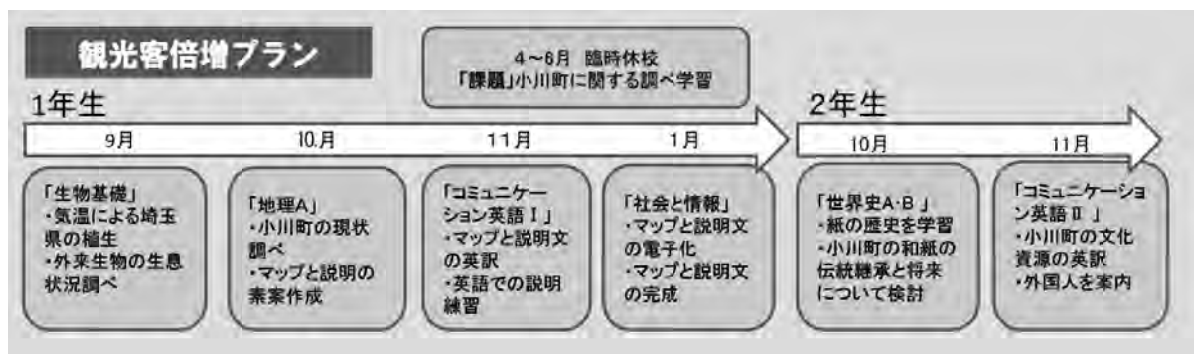
前年度に計画していた取組（**図1**）は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴って大き

く変更を余儀なくされた。しかしながら内容や実施方法を変更したり、新たな授業を創り出したりしながら、各教科・科目が横断連携した取組（図2）を実践することができた。

（図1）



（図2）



また、3年生の「総合的な学習の時間」においては、以下の9つの課題解決に向けた授業実践が行われた。いずれも新型コロナウイルス感染症拡大による休校等によってスタート時期が遅れたが、探究のプロセスの「まとめ・表現」まで行うことができた。

科目	タイトル	題材・課題等	実施時期
総合的な学習の時間	日本文化研究	万葉集と仙覚律師	通年
総合的な学習の時間	くらしと科学	細川紙とは何か	通年

総合的な学習の時間	総合英語研究	小川町のPR映像をつくろう！	通年
総合的な学習の時間	総合社会研究	小川町 街づくりプロジェクト	通年
総合的な学習の時間	総合歴史研究	小川町の歴史から現在の課題を探る	通年
総合的な学習の時間	生活と美術	小川和紙を使った工芸作品の制作	通年
総合的な学習の時間	いろいろな数学	小川町や比企地区の和算家に学ぶ	11月～1月
総合的な学習の時間	健康と運動	ぴっかり千両の新しい振付を考案する	8月～1月
総合的な学習の時間	音楽演奏研究	ぴっかり千両の新しい編曲を考案する	8月～1月

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各教科等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

「地域（小川町）を知り、地域（小川町）の課題発見・課題解決に資する」ことを目的として、計画、実践を行った。上記②の（図2）で示すように、1学年では、理科（生物基礎）→地歴（地理A）→外国語（コミュニケーション英語Ⅰ）→情報（社会と情報）でバトンをつなぎ、2学年では地歴（世界史A・B）→外国語（コミュニケーション英語Ⅱ）でバトンをつないだ。

④類型毎の趣旨に応じた取組について

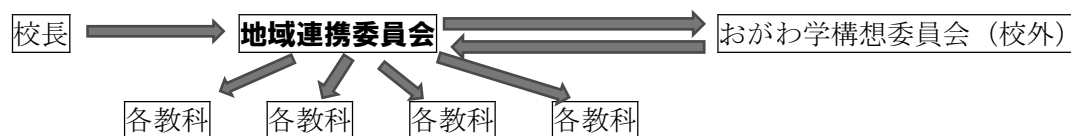
- ・ 県知事視察時のプレゼンテーション
- ・ 立教大学の地域創生関連ゼミ生との交流会
- ・ 学校地域WIN-WINプロジェクトフォーラム参加
- ・ 小川町子育て支援課主催フードパントリー（ボランティア）参加

⑤成果の普及方法・実績について

新型コロナウイルス感染症拡大により、昨年度まで本校生徒が参加していた小川町の行事のほとんどは中止となった。そのような状況の中でも、上記の取組に際して生徒が主体的に参加してくれた。今後も数少ない行事の実施であっても、主体的に地域に関わっていこうとする生徒を増やしていくことが大切である。そのため、教育課程内で全員参加を前提した取組と同時並行で、このように有志による取組を企画し生徒を参加させる、あるいは生徒に企画させる場面をさらに増やし、学校内の「地域魅力化」への意識を醸成していく。

ウ．研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制



- ・「地域連携委員会」は教務部教育課程係、各教科代表及び管理職が指名した教諭で構成される。
- ・校内に組織されている他の委員会と同等の機能を持ち、職員会議への提案が可能である。
- ・「地域連携委員会」は「教育課程委員会」と密に連携し情報を共有する。

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

(ア) 地域連携委員会委員長を務める教師の主な業務

- i 各会議開催のための連絡調整
- ii 各教科の地域連携ニーズの収集・情報把握
- iii 地域連携に係る諸事業の円滑な実施に向けた校内体制の整備
- iv 地域連携に係る諸事業を取り入れた教育課程の改善
- v 地域連携に係る諸事業についての校内外への情報発信

(イ) 支援体制

- i 持ち授業数の軽減
- ii 担当分掌業務の軽減
- iii 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて
 - ・運営指導委員会（管理機関（埼玉県教育委員会）の下に組織）による指導・助言
立教大学教授 空閑厚樹 氏
株式会社キャリアリンク代表取締役 若江真紀 氏
島根県立高校教諭（島根県教育委員会から埼玉県立学校に派遣）萬燈智子 氏
西部教育事務所長 福島みどり 氏
県企画財政部地域振興センター東松山事務所長 森孝 氏
 - ・おがわ学構想委員会に委員以外に下記がオブザーバーとして参画、それぞれの専門的見地からアドバイスをもらう。
三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社、東京学芸大学
- iv カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について
 - ・構想委員会（コンソーシアム）では、「おがわ学」の構築、実践に向けて、小中高校が連携したカリキュラムづくりに取り組んだ。まず、作業部会である担当者会議からおがわ学の骨子についての案が提示され、協議を行い合意形成がなされた。
 - ・カリキュラム開発をするため、産業能率大学の藤岡教授による研修会を行った。

(8) 目標の進捗状況、成果、評価

- ①「横断的・総合的な学習を通して探究的な見方・考え方を働かせ、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を習得した生徒の割合」については、42.2%と前年度から約20.3%減少した。目標の70%に対して、大きく減退した。次年度は目標に向けた指導と評価の改善を継続的に行う。
- ②「生徒の意識と行動に係るアンケート調査の結果、「将来、いま自分の住んでいる地域で働きたいと思う」と肯定的な回答をした生徒の割合については民間シンクタンクによる2度目の調査である。昨年の47.8%から今回は37.9%と約10%減少した。地域の産業構造等が空洞化していることも要因であると考えられるが、本校においては地域の魅力を再発掘していくことで、目標の60%を目指して実践を継続していく。

- ③「各教科・総合的な探究の時間において『おがわ学』を活用した、年間の総授業数」については目標65回に対して、532回と大幅に上回ることができた。今年度から本格的な実施となったが、4月～6月は休校や分散登校により実践を進めることができなかった。しかしながら、7月以降新型コロナウイルス感染症拡大に注意しながら、内容や方法を変更して実施した。次年度は、量的な部分だけではなく、「おがわ学」を学んだことによる生徒の変化・変容を丁寧に見取り、次の学びにつなげているかなどの質的な部分の向上を目指していく。
- ④「コンソーシアム（おがわ学構想委員会）の活動回数」では、構想委員会5回と担当者会議9回により、目標を大きく上回ることができた。1月に予定していた研究開発発表会を対面式ではなくオンラインでの実施に切り替えるなど、環境の変化に柔軟に対応しながらも計画的に進められた。「おがわ学フォーラム」の開催（オンライン）や授業で使用するテキストの作成および「おがわ学」を広く知っていただくためのリーフレットの作成など、内容的にも大きな成果を上げることができた。

（9）次年度以降の課題及び改善点

地域学である「おがわ学」を「探究的な学習」へとステージアップさせるために、探究のプロセスである①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現を生徒自身に踏ませていくことが課題である。また、新型コロナウイルス感染症拡大によって前倒しされた「GIGA スクール構想」による高速大容量通信ネットワークシステムを積極的に活用して、「おがわ学」と「探究的な学習」をより有機的に関連付けていくことも大きな課題である。「おがわ学の構築・実践」を行う上で、「GIGA スクール構想」による一人一台端末を前提とした探究のプロセスの実践（特に、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現）を行うことで、より「おがわ学」が「探究的な学習」に近づいていくと考える。

これらの課題を乗り越えていくためには、概念としての「おがわ学」「探究的な学習」「GIGA スクール構想」を校内はもとよりコンソーシアムなどで共有し、教職員や関係者を対象とした不断の情報共有の場が必要である。そのためには、研修会やフォーラムといった行事を校内、校外を問わず開催していくことが大切である。

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 横断的・総合的な学習を通して探究的な見方・考え方を働かせ、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を習得した生徒の割合						
a	本事業対象生徒:		62.50%	42.18%		70%
	本事業対象生徒以外:		63.50%	54.50%	54.50%	-
目標設定の考え方: 3学年時の「総合的な探究の時間」において7割の生徒が評価A						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 生徒の意識と行動に係るアンケート調査の結果、「将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある」と肯定的な回答をした生徒の割合						
b	本事業対象生徒:		47.80%	37.90%		60%
	本事業対象生徒以外:		-	-	47.70%	-
目標設定の考え方: 地域への貢献について6割の生徒が意識向上						
(その他本構想における取組の達成目標) 高校卒業後に地元企業に就職した卒業生の人数						
c	本事業対象生徒:		30	25		32人
	本事業対象生徒以外:		29	25	0	-
目標設定の考え方: 就職希望者(例年約40人)のうち8割が地元企業に就職						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 各教科・総合的な探究の時間において「おがわ学」を活用した、年間の総授業数						
a	0	0	55	532		65回/年
目標設定の考え方: 目標設定の考え方: 教科25回程度、総合的な探究の時間40回程度						
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 成果報告会の実施回数と参加者数						
b		1回・230人	1回・200人	1回・850人		1回・300人
目標設定の考え方: 学校、教育委員会、企業、行政、関係団体が参加するフォーラムを開催(1月)						
(その他本構想における取組の具体的指標)						
c						単位:
目標設定の考え方:						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) コンソーシアム(おがわ学構想委員会)の構成団体数						
a	0団体	0団体	10団体	10団体		10団体
目標設定の考え方: 県教委、町役場、町教委、小中高等学校、産業、文化、観光、社会教育団体、学校応援団、地域住民						
(その他本構想における取組の具体的指標) コンソーシアム(おがわ学構想委員会)の活動回数						
d	0回	0回	13回	14回		10回
目標設定の考え方: 構築委員会+分科会開催 3回、分科会のみ開催 7回(テレビ会議等による実施も含む。)						

「おがわ学の構築・実践」 - 学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト -

育成される地域人材像

- 1 夢や志、豊かな心を持ちつつ社会の激しい変化に対応して主体的に社会に関わり、未来に向けて新たな価値を創造する力
- 2 幅広い知識と教養、豊かな情緒と道徳心、健やかな体、伝統や文化や我が国と郷土を愛する態度
- 3 子供たちだけではなく大人も学びを通じて可能性を最大限に伸ばし、一人一人が生徒にわたって活躍できる力

おがわ学

小川町に関する資料

歴史、偉人、文化、伝統、産業、観光、基本データ(人口等)などをまとめた資料を各教科で活用

【学びの例】
○国語(古典)
「風の細道」について、町内に7つある松尾芭蕉の碑をめぐり、芭蕉の足跡をたどることにより学習内容を深め、定着させる。
○家庭科
町の郷土料理についてフードワークを通して調査し、地域の人々の生活や産物を知り、地域との絆を強める。

探究的な学習過程における学習内容

地域課題を情報収集し、整理・分析を行い、学びの成果の発表や、施策について首長への提言を行うなど、発信していく

【学びの例】
・地域へアンケート調査を行い、情報収集
・グラフやマップで情報を整理・分析
・地域の方に学びの成果を発表
・フォーラムで自分の意見の発表を行うとともに、課題解決の施策を小川町長へ提言

地域を窓にして考えるグローバルな課題

地域の資源からグローバルな視点や世界規模の課題を導き出す

【学びの例】
○社会(対外社会)
・世界無形文化遺産である細川紙について学ぶと共に、国連、ユネスコの役割や体制、世界遺産について学ぶ。
・自然由来の原料でできている和紙の活用かとのように課題問題に貢献できるか課題と解決策を導き出す。

生徒の学びを導くワークシート

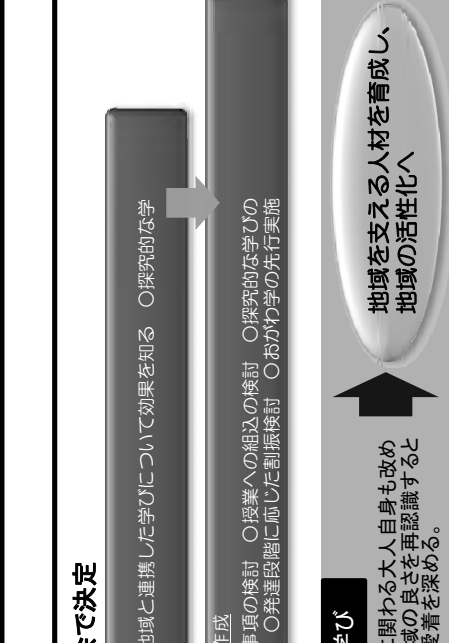
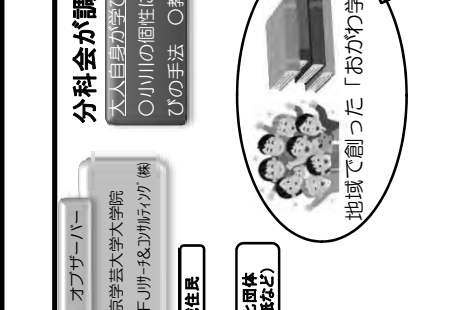
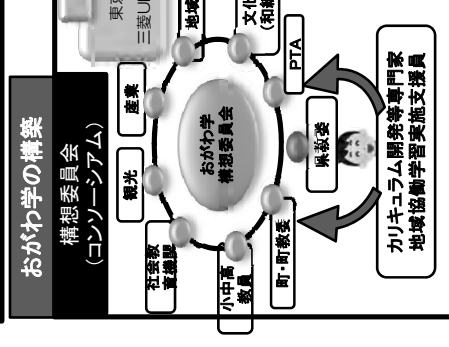
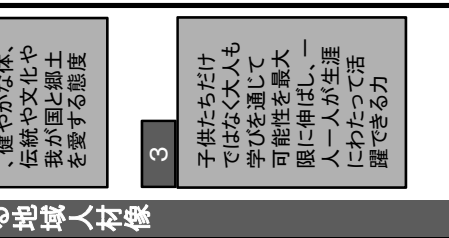
左記のことを総合的につなぎ、課題解決や将来の展望を描くための指導に結び付ける

【例】
・発達段階に応じた探究的な学び(課題を設定し必要な情報を取り出し収集・整理・分析して思考、気づきや発見、自分の考えを判断し表現する)を導くワークシートを作成。

人材バンク

「おがわ学」を構築・実践し、支え、育てる地域の組織や人材のデータベースを構築し、外部人材を活用した授業を実施

【例】
・各専門分野や特技など詳細な内容を記載した外部人材の名簿を作成。
・名簿を活用した公開授業やフィールドワークを実施。



おがわ学の実践

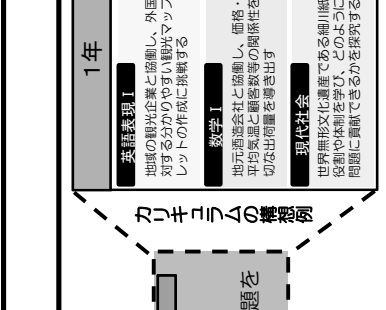
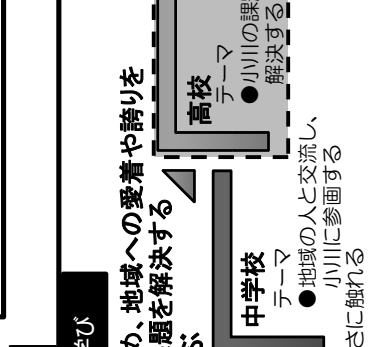
発達段階に応じた学び

地域への理解を深め、地域への愛着や誇りを育むとともに地域課題を解決する能力を体系的に学ぶ

小学校
テーマ
●小川の素晴らしさに触れる
●小川を知る

中学校
テーマ
●地域の人と交流し、小川に参画する

高校
テーマ
●小川の課題を解決する



II 研究開発会議報告

1 構想委員会報告

日程・会場	活動内容
令和2年6月10日(水) WEB会議	第1回「おがわ学」構想委員会 ・委員の委嘱及び今年度の取組について確認 ・「おがわ学」お披露目会(仮称)について協議
令和2年7月22日(水) リリックおがわ1階 講義室2・3	第2回「おがわ学」構想委員会 ・「おがわ学」お披露目会(仮称)の名称・開催について協議 ・「おがわ学」テキスト作成方針について協議 ・「おがわ学」構想委員会委員との意見交換について ・「おがわ学」担当者会議の部会設置について
令和2年10月8日(木) 小川町立図書館2階 視聴覚室	第3回「おがわ学」構想委員会 ・「おがわ学」フォーラムの進捗状況・内容について協議 ・「おがわ学」テキスト作成の進捗状況について報告 ・「おがわ学」リーフレットの内容について協議
令和2年12月7日(月) リリックおがわ2階 会議室1・2	第4回「おがわ学」構想委員会 ・「おがわ学」フォーラムの詳細について協議 ・「おがわ学」テキストの進捗確認と完成への意見交換
令和3年3月11日(木) リリックおがわ1階 講義室2・3	第5回「おがわ学」構想委員会 ・「おがわ学」フォーラムの振り返り ・本年度の成果と課題について確認 ・次年度の取組について協議

2 担当者会議報告

日程・会場	活動内容
令和2年5月29日(金) WEB会議	第1回「おがわ学」担当者会議 ・委員の委嘱及び今年度の取組について協議
令和2年7月1日(水) リリックおがわ1階 講義室2・3	第2回「おがわ学」担当者会議 ・「おがわ学」お披露目会(仮称)の名称・開催について協議 ・「おがわ学」テキストの作成方針について協議
令和2年8月25日(火) リリックおがわ1階 講義室2・3	第3回「おがわ学」担当者会議 ・「おがわ学」運営指導委員会の報告 ・「おがわ学」お披露目会(仮称)の名称について協議 ・「おがわ学」各部会の進め方について協議 ・「育成を目指す児童生徒の姿」について協議 ・人材バンクについて協議

令和2年9月16日(水) リリックおがわ2階 会議室1・2	第4回「おがわ学」担当者会議 ・「おがわ学」に係る授業記録について協議 ・「おがわ学」テキストの作成について協議 ・「おがわ学」リーフレットの作成について協議 ・「おがわ学」フォーラムについて協議
令和2年10月23日(金) 小川町立図書館2階 視聴覚室	第5回「おがわ学」担当者会議 ・「おがわ学」フォーラムについて協議 ・「おがわ学」テキストの作成について協議
令和2年11月13日(金) 小川町立図書館2階 視聴覚室	第6回「おがわ学」担当者会議 ・「おがわ学」フォーラムについて協議 ・「おがわ学」テキストの作成について協議
令和2年11月25日(水) 小川町立図書館2階 視聴覚室	第7回「おがわ学」担当者会議 ・「おがわ学」フォーラムについて協議 ・「おがわ学」テキストの作成について協議 ・進捗状況について共有
令和3年1月15日(金) WEB会議	第8回「おがわ学」担当者会議 ・「おがわ学」フォーラムのリハーサル
令和3年3月4日(木) 小川町立西中学校	第9回「おがわ学」担当者会議 ・「おがわ学」フォーラムの振り返り ・本年度の成果や課題について確認 ・次年度の取組について協議

3 推進協議会報告

日程・会場	活動内容
令和2年6月3日(水) WEB会議	第1回「おがわ学」推進協議会 ・「おがわ学」の取組について ・令和2年度「おがわ学」テキスト作成スケジュール ・「おがわ学」お披露目会(仮称)について
令和2年7月22日(水) 小川町役場第2委員会室	第2回「おがわ学」推進協議会 ・「おがわ学」披露目会(仮称)の名称・開催方法について ・「おがわ学」テキスト作成方針について ・「おがわ学」構想委員会委員との連携協働について ・「おがわ学」担当者会議の部会設置について
令和2年9月25日(金) 小川町役場第2委員会室	第3回「おがわ学」推進協議会 ・「おがわ学」フォーラムについて ・「おがわ学」テキストについて
令和2年12月15日(月) リリックおがわ2階 会議室5	第4回「おがわ学」推進協議会 ・「おがわ学」フォーラムについて ・「おがわ学」テキストについて

令和3年3月24日(水) リリックおがわ会議室5	第5回「おがわ学」推進協議会 ・今年度の取組について ・来年度の取組について
-----------------------------	--

4 運営指導委員会報告

日程・会場	活動内容
令和2年8月5日(水) 知事公館2階小会議室	<p>第1回「おがわ学」運営指導委員会</p> <p>○出席者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・委員4人 ※オンライン参加を含む <ul style="list-style-type: none"> 空閑 厚樹(立教大学コミュニティ福祉学部教授) 森 孝(川越比企地域振興センター東松山事務所長) 萬燈 智子(県立浦和第一女子高等学校教諭・島根県教員派遣) 歌代 圭介(西部教育事務所長代理) ・管理機関5人(生涯学習推進課) ・「おがわ学」構想委員会3人 (篠田委員長、佐藤副委員長、佐藤コーディネーター) <p>○主な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 令和2年度取組について <ul style="list-style-type: none"> ア 「おがわ学」構想委員会について イ 授業づくりについて ウ 小川高校の取組について (2) 質疑応答、指導助言
令和2年11月6日(金) 県立小川高等学校 図書館・応接室	<p>第2回「おがわ学」運営指導委員会</p> <p>○出席者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・委員5人 <ul style="list-style-type: none"> 空閑 厚樹(立教大学コミュニティ福祉学部教授) 若江 真紀(株式会社 キャリアリンク代表取締役) 森 孝(川越比企地域振興センター東松山事務所長) 萬燈 智子(県立浦和第一女子高等学校教諭・島根県教員派遣) 永井 智弘(西部教育事務所長代理) ・管理機関5人(生涯学習推進課) ・「おがわ学」構想委員会3人 (篠田委員長、佐藤副委員長、佐藤コーディネーター) <p>○主な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「おがわ学」進捗状況報告(篠田委員長) ・質疑応答、指導助言 <p>※当日は埼玉県教育長視察を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「おがわ学」授業視察、県教育長との意見交換など

<p>令和 3 年 3 月 22 日 (月) WEB 開催</p>	<p>第 3 回「おがわ学」運営指導委員会</p> <p>○出席者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・委員 3 人 <ul style="list-style-type: none"> 空閑厚樹 (立教大学コミュニティ福祉学部教授) 森 孝 (川越比企地域振興センター東松山事務所長) 歌代 圭介 (西部教育事務所長 代理) ・管理機関 4 人 (生涯学習推進課) ・おがわ学構想委員会 2 人 (篠田委員長、花輪委員) <p>○主な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の取組について ・来年度の取組について ・質疑応答、指導助言
---------------------------------------	--

Ⅲ 実施科目報告

1 地理A

地理A	受講生徒：1年生 全員	担当者：教諭 大澤 謙司
-----	-------------	--------------

(1) 授業のねらい

小川町の人文地理的学習を通して、町の実態をまず知ることを目指す。そこから町の特徴や歴史的・地理的に注目すべき点を発見させる。また、実際に町の地図を作成することにより、地域を深く理解させ、自分の地域を考えさせる重要な機会とする。

(2) 実施報告

ア. 授業の取組

1 学期：休校課題で小川町の調べ学習

2 学期：調べ学習を基に、小川町のテーマ別マップ作成

小川町の鉄道に関する特別授業

以上に対する総括・アンケートを実施

イ. 体験的・課題解決的な学習活動

2 学期に小川町のテーマ別マップを作成。生徒は苦心しながらも、比較的意欲を持って取り組んでいた。アンケートも好結果であった。

ウ. 学習成果物

作成した地図、小川町の鉄道資料、アンケート等

(3) 分析と考察

地理学習の中で、地元の地理を学習する項目は確かにあるが、例年授業時間数の関係で扱うことは難しかった。限られた時間数の中で地元の地理を行うには、もっと時間をかけることができれば、フィールドワーク等も入れて行った方がよい。しかし、やや唐突に組み込んだ内容にもかかわらず、生徒は地図作成等に熱心に取り組み、小川町に対する認識も多少深まったのではないかと感じる。これを機会に自分の地域も視野に入れて考えてくれるようになって欲しい。

(4) 研究成果・次年度へ向けての課題

「おがわ学」が開始されて2年が経過したが、正直言ってどこに着地点があるのかが見えない。そして地元出身者が少ない高校で、地域学を行う困難性をつくづく感じている。「地域学を通してそれを自分の地域にも生かす」という掛け声はわからなくもないが、これはある種の地元愛のようなものがなければ限界があると思う。今後は、今までの反省を踏まえ、無理のない範囲で、どこかに着地点を見つけるべきである。そうでなければ、ただ実施しただけで終わってしまうように思う。今後、地元愛を育成するため、フィールドワーク等も取り入れたい。

2 世界史A・B

世界史A・B (紙の歴史と和紙)	受講生徒：2年生 全員	担当者：教諭 花輪 恵 泉水 学 小泉 昇一
-----------------------------------	--------------------	---

(1) 授業のねらい

- ・世界の歴史を通して、紙の利用の仕方や製法の変遷などを学ぶ。
- ・紙に代表される記録媒体の歴史を学び、各々の特性を知り、和紙との比較をする。
- ・記録媒体が改良されてきた過程を知り、環境問題、デジタル化等の未来を予測する。
- ・「細川紙」など三和紙が世界遺産に登録された意味を知り、和紙の今後の展開を提案できるようになる。

(2) 実施報告

ア. 授業の評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性
・【分析力】 各記録媒体および和紙の特性を知り、その特徴を分析することができる。	・【表現力】 自分が調べたことを、相手に論理的に伝えることができる。	・【協働力】 グループで話し合い、課題に取り組むことができる。

イ. 指導計画

時	指 導 内 容 等
1～3	第6章 イスラームの広がりとおアジア世界の展開 1. イスラーム帝国の成立 2. 各地のイスラーム文化
4	3. イスラームの都市と文化 「都市の発達」「イスラームの学問」「イスラームの技術と文芸」
5	イスラームがアジアの技術をヨーロッパに伝えたことから、記録媒体の歴史について考察する。 これまで学習してきた、記録媒体と、和紙とを比較する。 将来の記録媒体について検証する。 歴史的過程から、紙が今後どうなるのか予測する。
6	ゲストティーチャーから和紙についての話を聞く。 和紙の今後の活かし方について考える。

ウ. 授業内容

5 時間目

ワーク 1. 「『記録』するということは人類の歴史にどのような意味があるか」考える。

→ 記録することで「歴史」は始まった。記録がなければ、昔の出来事を具体的に知ることはできない。

ワーク 2. a. パピルス b. 粘土板 c. 木簡・竹簡 d. 紙 e. 羊皮紙 f. パルプ紙 から 1 つ選び、①～⑦について調べる。

①時代 (いつ)	②利用された地域	③原材料	④書かれた内容	⑤利点
⑥弱点 (廃れた原因)	⑦和紙との比較	⑧その他、気づいたこと		

→ 粘土板以外の実物を生徒たちに触れさせて考察させた。

※ワーク 1・2 は宿題として事前に取り組みせ、提出されたプリントを教員がスライドにして、生徒に発表させた。生徒たちはグループ 1 台のタブレットで、プリントの内容を共有した。

ワーク 3. 記録媒体の歴史的進化、未来について考える。

→ グループごとに a～f の主に使用された時代を並べ替え、その進化の過程を考察した。現在でも、スマートフォンを使ってメモをし、タブレットで授業を受けるなどしており、今後、さらにデジタル化が進むと予想した。

ワーク 4. デジタル化・紙のメリット・デメリットについて、グループで話し合う。

	デジタル化	紙
メリット	やり方を覚えれば簡単に操作できる。便利。 大量のデータを記録できる。共有しやすい。	軽い。 見やすい。 折たたためる。
デメリット	目が悪くなる。 バッテリーが必要。 バグが起こる。	書くのが面倒くさい。 字が汚いのがバレる。 燃えたら無くなってしまう。水に弱い。 森林伐採などの環境問題。失くしやすい。

ワーク 5. 授業の振り返り、分かったことや疑問に思ったことをまとめる。

→ デジタルのメリット・デメリットを知ることができた。絶対にメリットだけのものではなく、どちらも必要だと思った。昔の人が一生懸命頭を働かせて工夫していたことが分かった。時代を経るごとに記録媒体が進化していることが分かった。記録媒体に、その歴史、時代の特色と背景が映し出されていたことが分かった。

6 時間目

ワーク 1. 小川町、東秩父村原産の「細川紙」は、ユネスコの無形文化遺産に、島根の石州半紙、岐阜の本美濃紙とともに、その紙漉きの技術が認定されていることを知る。
和紙の魅力について考える。

→ 世界無形文化遺産に認定されたことは知っている生徒が多かった。「無形文化」として和紙漉きの技術が認定されたことを説明。他の 2 つの和紙については知らない生徒が多かった。

ワーク 2. ゲストティーチャー（講師）の紹介 小川町在住の和紙作家中島知子さん
講演「なぜ和紙を漉きたいと思ったか」

『和紙を母親が漉いている家庭で成長し身近に感じていたが、大変な仕事だと思っており、母親にも触ってもいいが仕事として漉かない方がよいと言われて育った。伝統工芸館で働くようになり、他の地域の人が小川の和紙を高評価していること、世界遺産に登録されたことに驚いた。小川で和紙の作品を作っている作家が少なかったので自分で作品を作ってみようと思った。作品を作る中で自分でも和紙を漉きたいと思うようになった。細川紙伝承のための研修生制度があることを知り応募。和紙を漉けるようになったが、すばらしい「細川紙」を漉くことは本当に大変なことだと実感している。』

ワーク 3. 「もし1枚の和紙があったら、あなたはどのように使いますか？」をテーマに、和紙のこれからについて考えた。まず自分にできることを考え、それが後世に和紙を残すためにできることにつながる等を説明した。

→ 講師の中島さんが一枚の和紙を立体にできることを生徒に対しデモンストレーション。その後、生徒に大判の和紙（細川紙）をグループごとに触らせながら、適宜アドバイスしてもらった。



ワーク 4. グループで話し合ったことを発表する。

→カーテンにする … 和紙の遮光性を利用。ヤオコー（地元発祥のスーパーマーケット）の自転車置き場の屋根に利用されているから。

スマホケースにする … みんなが利用するものだから。水に弱いと思ったが、こんにゃくのりで防水ができると聞いた。

マスクにする … 触り心地や、においがよかった。今、必要とされているマスクに最適だと思ったから。

手紙を書く・・・大切な人への手紙を書きたいと思った。

大切にとっておく・・・地元出身なので小・中学校で和紙漉きの経験をしたが、もったいなくて全部取ってあるから。

ワーク5. 授業の振り返り。学んだ感想。わかったこと。疑問に思ったことをまとめる。

→ 和紙は大変な重労働を重ねて、1枚1枚が作られていることがわかった。

なぜ液体から紙ができるのか疑問に思った。

和紙の美しさ、手漉きの大変さすごさに圧倒された。

日本の伝統を守ることの大切さに気が付いた。

デジタル化の時代でも和紙を残すためには、SNS等を使って、和紙の色々な使い方を発信していけばいいと思った。

(3) 分析と考察

《授業》

生徒たちは、非常に熱心にグループワークに取り組んだ。

ソーシャルディスタンスに配慮した6時間目では、対話も盛んに行われた。

実際の記録媒体（パピルス・竹簡・羊皮紙・和紙）を見て、触る経験により、メリット・デメリットの考察ができ、大切であったと感じる。

和紙漉きの経験を持つ生徒は一定数いたが、和紙作家の方の話は非常に新鮮で、特に1枚の紙を一瞬で立体にしたデモンストレーションは印象的であった。そこから多くインスパイヤーされたように思う。また、講師が各グループに大判の細川紙を触らせつつ、個別に対話をしてくださりながら、生徒の創造を後押しするコメントをくださったことで生徒たちは安心して発表できた。話合いの時間をもう少しとることができたらよかったと思う。生徒たちが、この授業の経験を3年生の総合的な探究の時間に繋げることができることを期待する。

《講師依頼》

実際に15分で「なぜ和紙を漉きたいと思ったか」について話すことは難しいことであった。

講師探しは困難を極め、コーディネーターだけでなく、町立図書館長の新田文子氏、小川町のにぎわい創出課の安田氏の尽力のおかげで中島氏に引き受けていただくことができた。新田氏、中島氏と担当者の打ち合わせは、3時間程度、当日の1コマ終了後の1時間の計4時間。しかし、それ以前に、新田氏と中島氏の打ち合わせはどの程度行われたのかは図り知れない。構想委員会・担当者会議等で協力いただいている新田館長や、他の授業でもお世話になっている小川町役場にぎわい創出課・和紙体験学習センターの安田氏の協力あって、授業を成立させることができた。

(4) 研究成果・次年度へ向けての課題

コロナ禍の中、今年度からタブレットを利用が始まり、授業のデジタル化が進むと予想される。

このタイミングで紙を利用することのメリット・デメリットを考えさせることができたことは、今後の授業展開に大きな意義があったと思う。ゲストティーチャーを迎え、公開授業で和紙の今後の利用の仕方についてグループで考え、それぞれの意見を合わせて一つの答えに到達し、発表できたことは、生徒にとって大きな自信になったようだ。この授業で考えた和紙の利用法が、来年度の総合的な探究の時間で、実現されることを期待する。

3 生物基礎

生物基礎 (小川町の生物多様性) (小川町の年降水量と年平均気温)	受講生徒：1年生 全員	担当者：教諭 内田 智之
--	--------------------	---------------------

(1) 授業のねらい

本校のある小川町に関する資料から情報を読み取り、小川町の現状の課題と魅力のある町になるために必要なことを考え、意見を出し合い、小川町に対する興味関心・問題意識を持つきっかけとすることで、他教科との連携や学びの実践に繋げる。

(2) 実施報告

(1) 実践授業の取組

月	時数	内容	用意したもの
8	1	小川町の現状の課題と魅力のある町になるために必要なこと ・小川町と地元の植生について比較してみよう	パワーポイント プリント
9	3	・外来生物（植物）の繁殖からわかることを考えてみよう ジグソー活動 小川町の課題をピックアップし、魅力あふれる町にするために必要なことについて話し合う ・エキスパート資料を読み込む ・班で情報共有及び意見をまとめる ・クロストーク（ワールドカフェ） ・自分の意見をまとめる	パワーポイント 参考資料 ワークシート

(2) 体験的・課題解決的な学習活動(生徒の活動の様子)

登校するためだけに通っていた小川町について資料や夏休みの課題から学び、良いところや課題となるところを見つける良い機会となった。また、小川町在住の生徒と直接意見交換をすることで、それぞれの地元や人の流入を増やすためには何が必要か、というところに想像力を膨らませながら、他班との意見交換をする中で、新しい発見を得られている様子が見られた。



(3) 分析と考察

小川町がどういうところであるのか、理科(生物基礎)の分野から「知る」という段階を「小川町と地元の植生について比較してみよう」と「外来生物(植物)の繁殖からわかることを考えてみよう」という課題で、実際に足を運び、体感したものを成果物としてまとめ、見える化することで、より具体的な理解に繋がると考えた。



また、次の授業では半年ほど通った上での率直な印象を書いてもらいつつ、下図のような3種類の資料をもとに小川町の課題について探っていくことで、表面的な印象だけでなく、内側にある課題や知らなかっただけで魅力があるということを理解するキッカケづくりになった。

・ジグソー活動資料(エキスパート活動:農家)

小川町の魅力の一つである有機農業がどういったものであるのか。また小川町の土地の特徴を知ることで魅力ある農作物が作られていることを知る。

・ジグソー活動資料
(エキスパート活動:町役場職員)

世界的な取り組みがなされているSDGs(持続可能な開発目標)について学び、小川町の特徴と合わせて理解していく。

・ジグソー活動資料
(エキスパート活動:小川町在住ご家族)

資料から小川町で生活する魅力の一例を知り、大きな課題の一つとして人口減少について学ぶ。

また、市町村の規模別による重要度と満足度の分布を見て、自分の住んでいる街をイメージしつつ、小川町がより住みやすくなるために、それぞれの年代目線となって、良いところと足りないところについて話し合う。

(4) 研究成果・次年度へ向けての課題

ア. 研究成果



外来生物（植物）の繁殖状況を各自で調べてきたものを昇降口前に貼っておき、プロットしたもの。自分の住んでいる地域をはじめ、多くの外来生物（植物）がいるというのが見て取れる。

(左図)

ジグソー活動による成果として、小川町在住ではない生徒と小川町在住の生徒が混在した中で、班として資料の読み込みと情報の共有、他班との意見交換をしたことで、部分的ではあるが「知る」「学ぶ」というステップを踏むことができたと思われる。

特に①の授業前の内容から⑥授業後の回答からも学びが得られている様子うかがえる。



イ. 次年度へ向けての課題

- (ア) 生物基礎は2単位の為、授業時間の確保が難しく、行えるタイミングが長期休みの前後。次年度以降は内容をもう少し精査する必要がある。新しい内容を盛り込み過ぎたため、消化不良になっていたため。
- (イ) 外来生物（植物）の繁殖調査は調査シートを配り、もっと精緻に行う必要があったと考える。調べ学習の様になってしまったが、目的は実際に歩き、発見してきてもらうこと。
- (ウ) ジグソー活動資料の簡素化。SDGsについては、すべての目標を伝えず、生物分野における一部を切り取って考えさせるというやり方を検討する。
- (エ) ジグソー活動資料の人口減少に関する資料の変更。生徒の出したワークシートのほとんどが小川町を魅力ある街にするために行うことが、人口増加に関する施策ばかりになってしまった。考えやすいテーマではあるが、小川町在住の生徒もいるので、その生徒に話してもらうなど工夫の余地がある。

4 美術Ⅱ

美術Ⅱ (貼り絵)	受講生徒：2年生 56名	担当者：教諭 新井 三千夫
--------------	--------------	---------------

(1) 授業のねらい

ア. 題材設定理由

- ・手紙やメッセージカードなど、一工夫するだけでオリジナリティー溢れた楽しい作品が出来ることを学び、和紙に興味と関心を持たせたい。

イ. 授業の目標・授業のねらい

- ・準備から作品完成まで、主体的に見通しを持ち活動する。
- ・作品を作ることを通し、言語活動や自己表現の場を広げる。
- ・小川町について調べたり、和紙について考えたりする。

ウ. 今後の学習へのつながり

- ・小川町の歴史や文化財への興味関心と理解。
- ・芸術を愛する心情や、心豊かな生活を送るための生涯学習。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

過程	学 習 活 動	支援等
準備段階 1時間	① 小川和紙について考える。 細川紙とは。和紙の特徴など。 フリートーク。今、何を知っているか？ ② 和紙の特徴を知り、作りたいものを決める。 特徴はなにか考える。 ③ 完成予想を立て、構想を練る。 計画を立てたり、下絵を描いたりしてみる。	和紙見本 ・細川紙他 作品見本 制作上の問題点 ・何をどのように作るのかを把握
創作活動 1時間	④ 和紙を工夫して創造していく。 和紙の可能性を探る。 例：ハサミやカッターで切る。手でちぎる。折る。 丸める。重ねる。のり等で接着して固定していく。 ⑤ 制作途中で身近な人と意見交換しながら、より効果的に最適に表現できるように改良していく。	準備するもの ・和紙（折紙セット） （小川和紙、数種） ・のり・ハサミ・ カッター ・手紙や色紙、 メッセージカード
1 時 間 ま と め	⑥ 細部の仕上げ。作品完成。 ⑦ 意見交換会 お互いの作品を尊重しながら、感じたことや苦労したところ等を話し合う。	授業を振り返る

イ. 体験的・課題解決的な学習活動（生徒の活動の様子）

小川町について各自調べ、生徒同士で情報を交換することで、地元の地域について理解を深めた。和紙の素材研究では、ハサミやカッターで切ることだけでは和紙の良さが活かされないことや、様々な和紙の微妙な色合いなどの違いに気づいた。表現したい物の完成イメージを描き、平面で表現し、創作体験をした。

学習成果物（ワークシートや写真など）



（3）分析と考察

和紙で有名な小川町に目を向ける為に、地元で実際に制作している和紙を用意した。様々な和紙に直接触れて生徒は、色数の多さや種類の豊富さ、紙の感触を実感できた。和紙について聞くだけでなく、自分で見て触れる事が、創作表現の役に立ち、地域への興味関心にもつながった。

（4）研究成果・次年度へ向けての課題

ア. 研究成果

ユネスコ無形文化遺産に登録された細川紙への理解を深め、文化財に対しての重要性や意識が向上した。また3年次にも和紙の制作を予定しており、事前学習としても有効であった。地元小川町の和紙の素晴らしさを理解し、地域に目を向けることで、視野を広げる事が出来た。

イ. 次年度へ向けての課題

2学期終盤の取り組みで前の課題が終了していない生徒がいたため、活動時間に余裕がなかったが、次年度には幾分余裕を持たせるように計画を立てたい。

5 美術Ⅲ

美術Ⅲ (小川町を和紙で表現しよう)	受講生徒：3年生 18名	担当者：教諭 新井 三千夫
-----------------------	--------------	---------------

(1) 授業のねらい

ア. 題材設定理由

- ・身近な地域である小川町に限定することで、特徴や魅力を探りやすくし、和紙の可能性や面白さを知ること、コミュニケーション能力を高めやすくし、自己表現に活かすことができるようにしたい。

イ. 授業の目標・授業のねらい

- ・準備から作品完成まで、主体的に見通しを持ち活動する。
- ・作品を作ることを通し、言語活動や自己表現の場を広げる。
- ・小川町について調べたり、和紙について考えたりする。

ウ. 今後の学習へのつながり

- ・小川町の歴史や文化財への興味関心と理解。
- ・芸術を愛する心情や、心豊かな生活を送るための生涯学習。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

過程	学 習 活 動	支援等
準備段階 3～4時間	① 小川町について調べる。 例：植物、動物、昆虫、特産物、名所、風景など フリートーク。今、何を知っているか？ ② 資料をそろえて、平面か立体かの方向性を決める。 作りたいものの特徴は何か考える。 ③ 完成予想を立て、構想を練る。 計画を立てたり、下絵を描いたりしてみる。	調べ方助言 ・PC ・町へ出る ・書籍・人に聞く 制作上の問題点 ・何をどのように作るのかを把握
創作活動 6～7時間	④ 和紙を工夫して創造していく。 和紙の可能性を探る。 例：ハサミやカッターで切る。手でちぎる。折る。 丸める。重ねる。のり等で接着して固定していく。 ⑤ 制作途中で身近な人と意見交換しながら、より効果的に最適に表現できるように改良していく。 ⑥ 細部の仕上げ、作品完成	準備するもの ・和紙(折紙セット) (小川和紙、数種) ・のり・ハサミ・ カッター ・色紙
1 時 間 ま と め	⑦ 合同鑑賞会 お互いの作品を尊重しながら、感じたことや苦労したところ等発表し、小川町について意見交換する。	授業を振り返る

イ. 体験的・課題解決的な学習活動（生徒の活動の様子）

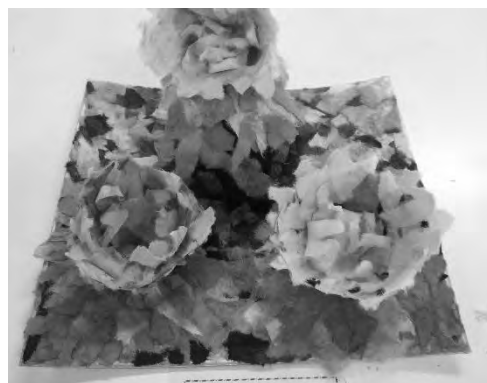


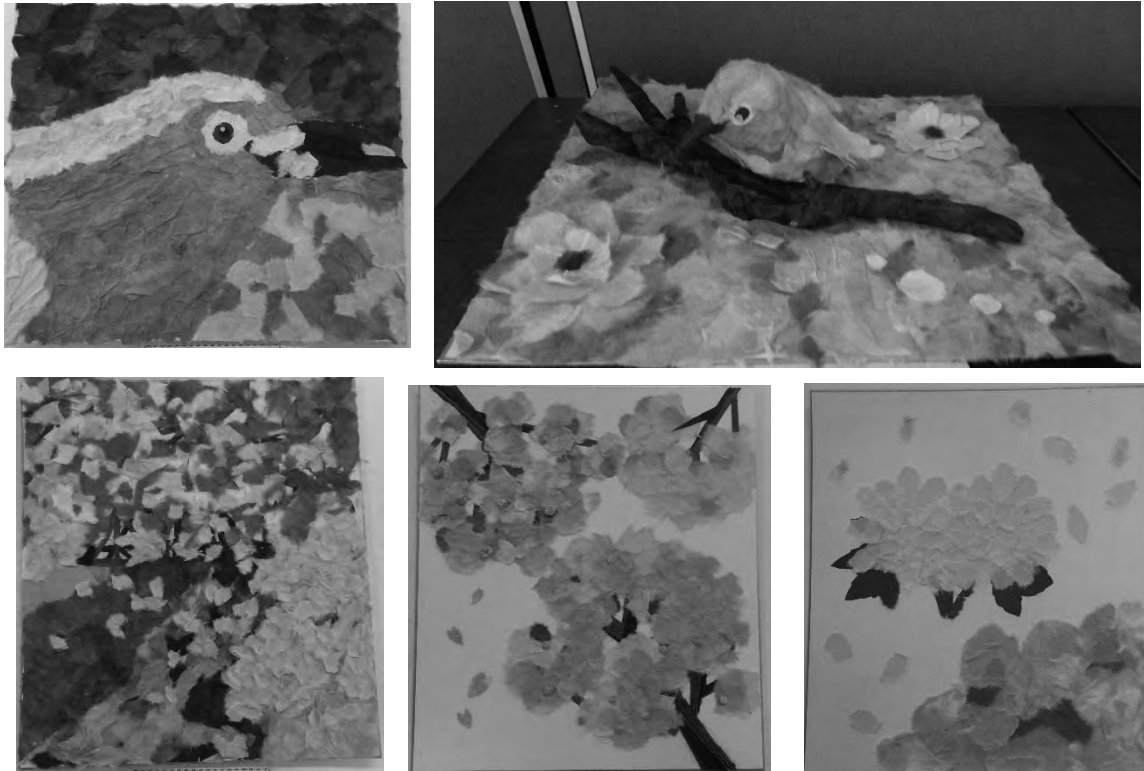
制作途中の様子



小川町について各自調べ、生徒同士で情報を交換することで、地元の地域について理解が深まった。和紙の素材研究では、ハサミやカッターで切ることだけでは和紙の良さが活かされないことや、様々な和紙の微妙な色合いなどの違いに気づいた。表現したい物の完成イメージによって立体にするか平面にするかを、自分の創作体験やチャレンジ精神により決定し、制作上の問題点を自分で解決し工夫しながら、意欲的に学び活動していた。

学習成果物（ワークシートや写真など）





(3) 分析と考察

モチーフを見てみると18人中、小川町の花(5)、鳥(9)、風景(3)、その他(1)となり、大旨地元の地域を考えて制作出来ている。各自工夫して制作してはいるが、技量面から考えると、向上の余地はまだあり、経験を積みればさらに素晴らしい作品になるであろう事が予測できる。

生徒にとっては、作品として完成させられた満足感や達成感があり、考え、そして努力すれば自分で出来るという自信につながっている。

(4) 研究成果・次年度へ向けての課題

ア. 研究成果

自分で考え表現していく過程で、何をどうすればよいのかは、問題解決能力の向上に非常に役立つことである。また制作上培った手先の巧緻性や作業に対する丁寧さは将来の仕事に生かせる事である。地元小川町の和紙の素晴らしさを理解し、地域に目を向けることで、将来の生活が心豊かに送ることが出来るといえよう。

イ. 次年度へ向けての課題

- (ア) 今年は第1学期の時間数が少なく、活動内容に余裕がなかったが、次年度には幾分余裕を持たせるように計画を立てたい。
- (イ) 和紙の素材は膨大になるため、使用しやすさを検討する。

6 コミュニケーション英語 I

コミュニケーション英語 I	受講生徒：1年生 全員	担当者：教諭 谷野 浩人 中村 博英 笠原 佐知子 三村 和大
---------------	-------------	--

(1) 授業のねらい

実際に町の地図を作成し地域を深く理解したうえで、それを英語で人に伝えることを通して英語のコミュニケーション能力を育てる。

(2) 実施報告

ア. 授業の取組

2学期 小川町のテーマ別マップ作成（地理A）

地理Aで作成した地図をもとに、数カ所のスポットを英語で説明できるように原稿を考えて発表する。

イ. 体験的・課題解決的な学習活動

生徒は友達と相談しながら意欲的に取り組んでいた。

ウ. 学習成果物

作成した地図（英訳版）

(3) 分析と考察

地理A→コミュニケーション英語 I→情報という横断的な授業展開を考えての取り組みであるが、実施時期や内容を綿密に計画しないと難しいと感じた。今回は地理、英語、情報の順番で、テーマを統一した授業展開を考えたが、それぞれの教科が授業の状況に応じて同じテーマを実施し、それを生徒自身がまとめるようなプログラムにするとやりやすいのではないか。

(4) 研究成果・次年度へ向けての課題

教科の横断的な展開の流れはできていたと思う。しかし、教科による多角的な視点で1つのテーマを扱うという点においてはもう少し研究が必要である。

7 総合的な学習の時間「日本文化研究」

総合的な学習の時間 （日本文化研究）	受講生徒：3年生 29名	担当者：教諭 山野 龍太郎
-----------------------	--------------	---------------

(1) 授業のねらい

「おがわ学」で日本文化を探究する題材として、小川町ゆかりの『万葉集』を取り上げる。多様な資料を調べる方法を学び、地域に関する興味を深めた調べた上で、『万葉集』の和歌を鑑賞したり、小川町との関係を調査したりする。具体的には、小川町に設置された万葉モニ

コメントを足がかりにして、自身で選んだ和歌の大意・背景・鑑賞などを報告することで、『万葉集』に関する理解を深めて知識を共有する。さらに、『万葉集』を地域資源として活用する方法など、現代の小川町とも関連した問題として、小川町と『万葉集』をめぐる探究を進めることを目標とする。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

日本文化研究では、国語と言う教科の枠組みを基本として、小川町ゆかりの『万葉集』を題材とした授業実践を進めてきた。今年度の指導内容は以下の通りである（4～5月は休校期間）。

時 期	指 導 内 容 等
6月～7月	ガイダンス（「おがわ学」の概要）、図書館やPCを使用した資料調査、小川高校フィールドワーク（校外学習の予行演習）、小川高校の魅力発見
8月～9月	日本の観光地（観光資源の調査）、小川町の魅力発見、小川町立図書館見学会、万葉モニュメント調査、調査結果の整理（データ入力+地図製作）
10月～11月	小川町フィールドワーク、小川町立図書館長講話（万葉集と仙覚と小川町）、万葉集の和歌鑑賞、プレ报告会、万葉集和歌报告会
12月～1月	万葉集プロジェクト企画、グループごとの作業、プレ発表会、万葉集プロジェクト発表会、「おがわ学」フォーラムの準備、本番

イ. 体験的・課題解決的な学習活動

日本文化研究では、年間を通じて「おがわ学」の取組を進めてきた。以下では、そうした取組でも『万葉集』と関連が深かった学習活動として、代表的な実践例をいくつか紹介してみたい。



小川町立図書館見学会



万葉モニュメント調査

《小川町立図書館見学会》

9月9日（水）、小川町立図書館の見学会を実施した。最初に視聴覚ホールで説明があり、全体を3つのグループに分けて、館内の施設や展示などを見学した。閲覧室・地下町民ギャラリー・おがわ仙覚万葉コーナーの3カ所を中心に、図書館職員の方々に案内していただいた。閲覧室では、蔵書の概要や利用の方法などを学んだ。地下町民ギャラリーでは、「被爆体験証言者と高校生

との共同制作による原爆の絵展」を見学した。おがわ仙覚万葉コーナーでは、仙覚律師が小川町の地を訪れて『万葉集註釈』を完成させた点について、新田文子館長から直々に解説していただいた。この見学会は、小川町と『万葉集』の関係を知ることを一つの目標にしており、小川町と『万葉集』の関係について、基本的な知識を得ることができた。

《万葉モニュメント調査》

小川町には、駅前のメインストリートを中心に、『万葉集』の和歌を紹介した万葉モニュメントが点在している。これは、小川町活性化プロジェクトの一環として設置されたもので、計70基を順番にたどれば、中城跡の仙覚律師遺跡を見学できるコースが設定されている。『万葉集』を探究する題材として、この万葉モニュメントに注目した。9月30日（水）、小川町駅の周辺に足を運んで、説明板に紹介されている和歌を記録していった。こうした作業を通じて、『万葉集』の和歌の一端に触れることができた。また、『万葉集』が小川町の地域資源の一つになっている現状なども確認することができた。調査結果は、グループごとに Google スプレッドシートに入力して、和歌本文・巻・歌番号・作者などの一覧表を作成した。



小川町フィールドワーク



小川町立図書館長講話

《小川町フィールドワーク》

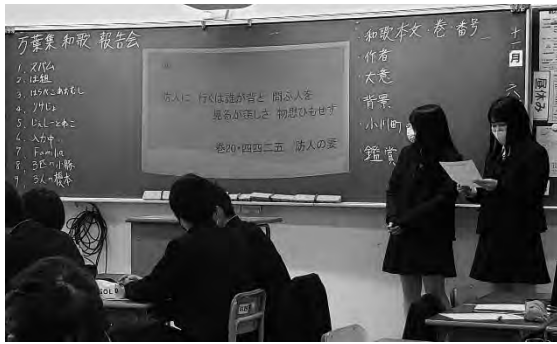
10月7日（水）、小川町フィールドワークを実施した。小川町教育委員会の職員に案内をお願いして、中城跡・大塚八幡神社・穴八幡古墳・大梅寺などの史跡を見学した。中城跡には、仙覚の顕彰碑などがあり、仙覚律師遺跡として整備されている。鎌倉時代に、仙覚と称する僧侶が、小川町の地で『万葉集註釈』を編纂したことが改めて確認できた。小川町と『万葉集』を結ぶ存在として、仙覚の活動に注目しながら、地域にも視点を移して、小川町と『万葉集』の関係について掘り下げていった。

《小川町立図書館長講話》

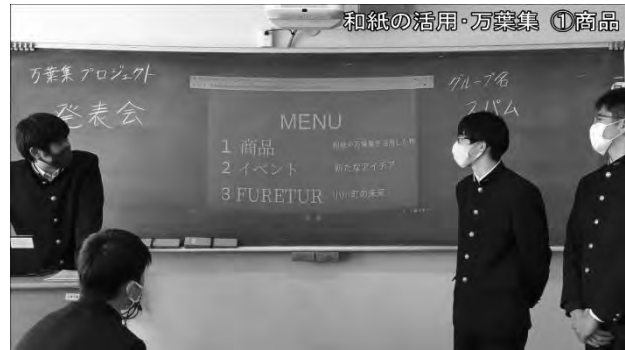
10月28日（水）、小川町立図書館を訪問して、新田文子館長の講話を聞いた。今回は、「なぜ小川町が万葉の里か万葉集と仙覚と小川町」というタイトルで、小川町と『万葉集』について、仙覚の事績を軸にしながら解説していただいた。小川町の専門家から説明を受けることで、『万葉集』の知識を深めて、探究の一助とすることができた。講話や質疑応答を通じて得られた知見は、グループごとに準備を進めている万葉集和歌報告会にも取り入れていった。

《万葉集 和歌 報告会》

小川町立図書館長講話なども踏まえて、万葉モニュメント調査で得られた一覧表をもとに、グループごとに好きな和歌を選択して調査させた。それぞれの和歌について、万葉モニュメントの通し番号・収録巻数・作者・大意（和歌の意味）・背景・和歌を連想させる小川町の情景・鑑賞（和歌の感想）を調べた。学校図書館やPCなどを利用しながら、9つのグループに分かれて作業を進めて、自分たちで選んだ和歌の内容を、報告会で発表していった。報告会の終了後は、評価シートに記入して、『万葉集』に関する理解を深めて相互に知識を共有した。



万葉集 和歌 報告会



万葉集プロジェクト発表会

《万葉集プロジェクト発表会》

万葉集和歌報告会の評価や反省を踏まえて、そのグループを基本的な単位として、より具体的に小川町と『万葉集』を関連づけた探究を進めていった。「万葉集プロジェクト」と銘打って、『万葉集』に関連する企画や作品を創作するという条件で、作業を開始した。グループで相談して企画書を作成して、指導者のチェックと承認を受けた上で、それぞれの企画や作品の開発を進めていった。基本的には生徒の自由な発想に任せて、教員は助言を最小限に抑えて、生徒の活動を見守ることを意識した。グループごとに作業の進捗状況に差があり、3学期の終盤まで時間を要した班もあったが、完成した企画や作品は、万葉集プロジェクト発表会を開いて紹介した。各グループの発表は、①万葉集グッズ～小川町の発展に向けて～、②ワイン&日本酒計画・オリジナル和紙計画、③万葉集ラベル、④万葉集カフェの企画、⑤万葉集ラベルデザイン案、⑥万葉集のしおり、⑦万葉酒、⑧和紙の万葉パネル、⑨和紙の活用・万葉集というもので、それぞれの興味関心に応じた様々な企画が出揃った。いずれも『万葉集』を素材としているが、小川町の特産品である和紙や地酒に関連づけた提案が少なくなかった。さらに、小川町の将来に向けた提言を含んだ発表もあり、地域課題に対する回答を提示するような成果が得られた。

(3) 分析と考察

1学期は、探究学習の基礎を固める段階として、調査や表現などの訓練を重ねてきた。小川町や小川高校に関する課題を提示して、学校図書館やインターネット等を利用して資料を探したり、現地に足を運んで記録をとったりしながら、多様な情報を集めて文章にまとめた。自身で資料を調べて整理する力を身に付けるのと同時に、地域社会に対する興味を高めることができた。休校期間もあり、十分な時間がとれなかったが、これ以降に『万葉集』を調べる際の基本となるような方法を見に付けることができた。

2学期には、小川町フィールドワークを実施して、地域社会に関する知識や関心などを培った。小川町駅を中心とする見学コースを決めて、地元の和紙を扱った店舗などを見学しながら、万葉モニュメントを確認して、小川町と『万葉集』の関係に注目した。また、小川町立図書館を見学したり、館長の講話を聞いたりすることで、『万葉集』の基本的な知識を得ることができた。

3学期には、『万葉集』に焦点を定めて、グループごとに探究を進めていった。『万葉集』の和歌を調べるだけではなく、小川町と関連づけて何ができるのかを考えることができた。万葉集プロジェクトでは、小川町の特産品を調べて、『万葉集』と結びつけた新たな企画を考案する姿勢がみられた。最終的には、小川町の課題に対する解決策や将来の発展に向けた計画など、地域的な問題に取り組んだグループが多く、現代の小川町にも関連したテーマとして、『万葉集』の探究を進めることができたと総括できるだろう。

(4) 研究成果・次年度へ向けての課題

ア. 研究成果

小川町の地域資源として、『万葉集』に取り組んで、①～⑨のグループごとに企画や作品などを発表した。小川町が抱える地域的な課題に踏み込んで、『万葉集』を通じた町づくりなどを提案できた。発表会では、小川町の将来に向けて、『万葉集』を通じた解決策を検討する視点が生まれたことが、特筆すべき成果として挙げられるだろう。①～⑨の発表内容は以下の通りである。

①万葉集グッズ～小川町の発展に向けて～

万葉集を使った小川町の発展計画。カードゲームのスマホアプリ、ノートと手帳、カレンダーを開発。万葉集グッズの商品化で経済的発展に貢献して、これを資金源として小川町の開発費用にする。小川町の発展のために万葉集グッズを活用したい。

②ワイン&日本酒計画・オリジナル和紙計画

ワインや地酒のラベルに細川紙を使用して、『万葉集』の和歌や小川町の景色などを印刷する。また、和紙の手漉き体験で、完成した和紙に『万葉集』の和歌を印刷する。小川町と『万葉集』の関係をアピールすることで、参加者の増加が期待できる。

③万葉集ラベル

飲物のペットボトルに和紙の万葉集のラベルを貼付。登山や七夕まつりで小川町を訪れる観光客に販売することで、様々な世代の人々に『万葉集』をアピールできる。

④万葉集カフェの企画

小川町の少子高齢化を改善するため、若者が交流する場としてインスタ映えするカフェを企画した。メニューには小川町の名物の地酒やワインを提供する工夫をした。

⑤万葉集ラベルデザイン案

小川町の特産品に『万葉集』の和歌を載せた商品ラベルを貼付。地酒、割箸の袋、鰻の箱、醤油、三代目清水屋の豆腐やおからドーナツ、大勝堂の大饅頭などに和歌をデザインして、道の駅や農産物直売所で販売することで多くの人にアピールする。

⑥万葉集のしおり

色彩豊かで丈夫な和紙の素材を活かして、『万葉集』の和歌を載せたしおりを制作。読書を通じて、小川町が『万葉集』ゆかりの地であることを伝えることを目指した。

⑦万葉酒

小川町の特産品である地酒やワインを『万葉集』と組み合わせて商品化。ラベルには小川町の和紙を使用して、商品を通じて『万葉集』に親しめるように工夫した。

⑧和紙の万葉パネル

小川町に設置してある万葉モニュメントを、小川町の和紙を利用して再現。和紙や『万葉集』に興味を持って、万葉モニュメントの存在を広めることを目的とする。

⑨和紙の活用・万葉集

①商品、②イベント、③FUTUREの三点から小川町の活性化を計画した。①商品は、和紙を利用した万葉集のブックカバー・しおり・行灯・提灯など。②イベントでは、商品やSNSを使って夜桜・紅葉・祭りを盛り上げて地域活性化を図る。③FUTUREとして、新たな情報ツールを駆使して、古き良き小川町をアピールして発展させたい。

イ. 次年度へ向けての課題

また、今年度の授業実践では、教師が設定した方針に沿って誘導された一面があり、全体を通して、生徒が主体的に探究を進められたかといえば、大きな課題が残った。グループや生徒ごとに取組や意欲にも濃淡の差があり、生徒全員が地域課題などの認識を共有できたのかと言えば、いささか心許ない部分がある。次年度は、「おがわ学」の理念を見つめ直して、問題意識や地域課題などを十分に浸透させた上で、授業実践の方針を見定めていく必要があるだろう。

8 総合的な学習の時間「総合歴史研究」

総合的な学習の時間 (総合歴史研究)	受講生徒：3年生9名	担当者：教諭 守田 亮
-----------------------	------------	-------------

(1) 授業のねらい

- ア. 小川町の歴史・文化・産業等を学び小川町が持つストロングポイントと課題について知る。
- イ. フィールドワークを体験させることにより、郷土の文化を愛し、尊重する態度をはぐくみ、小川町のストロングポイントの活かし方と課題解決の方法を考える。

ウ. 小川町の目玉である平成 26 年（2014）にユネスコ無形文化遺産に登録された細川紙の歴史を学び、細川紙だけでなくフィールドワークを通して、小川町の歴史・文化・産業等について考察し、現代における和紙や小川町内の資源の活用方法（売り出し方、他地域へのPR等）を考えて提案する。

（2）実施報告

ア. 実践授業の取組

月	時数	内容	備考
6	6	・小川町テスト及び小川町に関する講義 ・メモリーツリーの作成	分散登校
7	7	・個人課題研究 ・研究発表会	
8	3	・フィールドワーク事前学習	
9 ～ 10	16	・フィールドワーク 穴八幡古墳周辺散策、二葉楼見学及び武蔵鶴酒造、紙漉き体験 ・フィールドワークの振り返り	
10 ～ 12	20	・グループ課題研究 グループ分け、アイスブレイク、各グループ課題研究 ・発表	
1	6	・グループ課題研究の振り返り、改善 ・授業の振り返り	

イ. 体験的・課題解決的な学習活動（生徒の活動の様子）

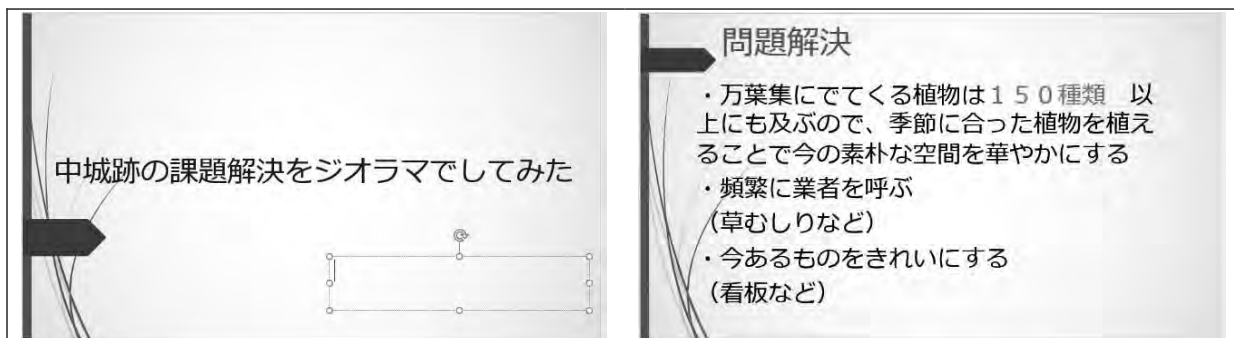
- ・体験的学習活動
 1. 紙漉き体験
- ・課題解決的学習活動
 1. 小川町メモリーツリー作成
 2. フィールドワーク①穴八幡古墳周辺散策 ②二葉楼及び武蔵鶴酒造見学
 3. 個人課題研究
 4. グループ課題研究

小川町の食文化

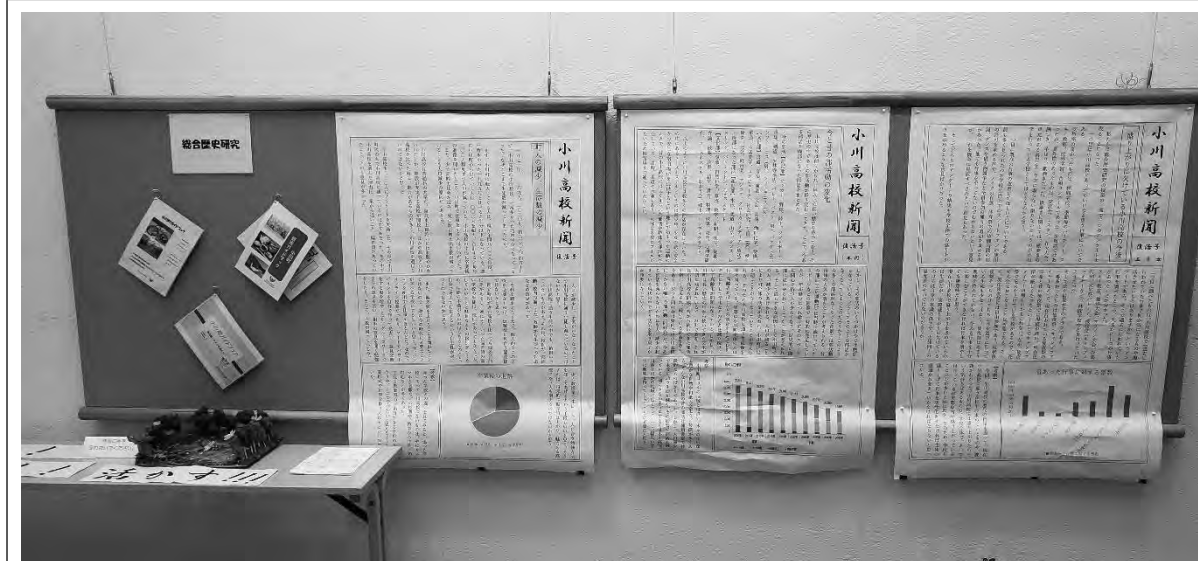
考察

・小川町の食文化は世界でも認められるほど高く自分が知らないだけで、長い伝統のあるものや素材への創意工夫がなされたものがたくさんあった。もっと小川町を探索して隠れた名店を探しSNSで発信し、若い人向けのお店を作ったりすれば更に小川町の食文化は浸透するのではないかと思った。

個人課題研究（小川町の食文化）



グループ課題研究（中城跡の課題解決をジオラマでしてみた）



グループ課題研究成果物

（3）分析と考察

授業の導入として、小川町テストと小川町に関する講義を行った。ここでは、生徒の小川町に関する基礎知識を教員側で把握する狙いがあった。

まずは、土台となる力をつけさせるため、小川町に関するメモリーツリー作成と個人課題研究を行うことにした。ここでは、課題研究に際して、必要な能力を8つ設定して獲得を図った。

【必要な8つの能力】

- | | | |
|---------------------|------------------|------------|
| 1. テーマの設定方法 | 2. インターネットの有効活用法 | |
| 3. 直接引用・間接引用・図表の引用法 | 4. 参考文献リストの書き方 | 5. 研究方法 |
| 6. 研究計画書の作成 | 7. 研究論文の作成 | 8. プレゼンの方法 |

1学期は上記の力を鍛え獲得することを目標とした。生徒は、メモリーツリーの作成と個人課題研究の資料作成により、8つの力を高めることができた。取り組み前はインターネット上にある情報を鵜呑みにすることが多くあったが、個人課題研究を行うことにより、情報の信ぴょう性を判断し、取捨選択することができるようになった。そのため、研究内容も情報を参考にしながら自身の言葉で記載することができるようになった。また、漠然とパワーポイントや研究論文を作成するのではなく、体系的に取り組むことができ、質の高い研究ができた。

ただ、成果物のプレゼンに関しては身についたとは言い難いものであった。緊張からか計画通りの発表ができず声が小さく聞き取りにくく、消化不良の発表が多く見受けられた。

2学期はフィールドワークを行い、知識の深化を狙った。穴八幡古墳周辺の散策、二葉楼及び武蔵鶴酒造の見学、紙漉き体験を行い、町の方から新たな知識を獲得し、刺激を受けることができた。ここで学んだことを生かし、1学期の成果及び課題を踏まえ、グループ課題研究を行った。

グループ学習では協働しながら問いをたて、課題解決に取り組んだ。グループ課題研究を通して生徒の主体性が育まれ教員に言われるがままに行動するのではなく自ら考え行動し実践していくことができるようになった。また、生徒が様々なアイデアを出しやすい環境を整えるためにアイスブレイクを実施し、生徒間の距離を詰めることができた。グループで課題研究を行うにあたり、教室の環境整備と生徒の倫理観の獲得がとても大切であることを実感した。良い雰囲気を取り組んだため、成果物は1学期身につけた力を十二分に生かしたものとなった。研究テーマは以下の通りである。

【研究テーマ】

第1グループ：小川高校の課題解決

第2グループ：中城跡の問題をジオラマで解決してみた

第3グループ：比企郡の歴史・小川町の人口問題と伝統産業・小川町の食文化

【特記事項】

第1グループ：情報収集のためGoogleClassroomを使用し全校生徒にアンケートを実施。

第2グループ：放課後にグループで現地調査を実施。

第3グループ：比企郡の歴史をオリジナル漫画でまとめた。

この1年でテーマ設定から研究論文の作成、プレゼンの準備まで行う力をつけることができた。しかし、プレゼンに関しては1学期と同様の課題が浮き彫りとなった。

（４）研究成果・次年度へ向けての課題

ア．研究成果

- ・生徒が自ら問いを立て、課題解決ができた。
- ・生徒の小川町に関する興味関心を高めることができた。
- ・課題研究を通して研究方法やプレゼン法を取得できた。
- ・グループ活動を通して協働力を獲得できた。
- ・小川町の歴史・文化・産業を知ることにより新たな視点で小川町をみることができた。
- ・卒業した後も小川町の課題解決について考え関わりたいと考える生徒を出すことができた。

イ．次年度へ向けての課題

- ・チャレンジ精神
- ・プレゼン能力の向上

授業を通して本校生徒の伸びしろを実感した。生徒がチャレンジできる環境作りを教員側で設定する必要性を感じた。このような環境を整えるために、まずは授業・部活動・行事で、生徒が主体的に取り組める環境を整備し、他者の気持ちを考え行動発言ができるようにする指導の必要性も感じた。また、座学だけでなく、生徒が主体的に取り組める授業の必要性も感じた。

9 総合的な学習の時間「くらしと科学」

総合的な学習の時間 (くらしと科学)	受講生徒：3年生 12名	担当者：教諭 新井 英男
-----------------------	--------------	--------------

(1) 授業のねらい

小川町の特産物である小川和紙の新商品を開発するという壮大な目標のもと、まずは基本的な和紙づくりのいろはからできることを学んでいく。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

月	時数	内容	用意したもの
6	4	和紙の特徴と作り方の工程を学ぶ	プリント、DVD
7		トロロアオイ栽培開始（水やりや観察は授業の合間に行う）	種、土、栽培箱
	3	牛乳パックによる紙漉き（はがき版）	プリント
8		夏休みの課題として2学期に行う	プリント
		和紙の新しい製品について考察しまとめておく	
	2	夏休みの課題の発表	プリント
9	3	新製品の具体化を練る。（図書館を利用）	
	2	トロロアオイ栽培、水やり観察、新製品の具体化	
	2	マーブリング	
	4	墨流し	
		揉み紙づくり（7月に漉いたはがき版）、	
		楮を使った紙漉き A4	
10		A4版揉み紙づくり	
		楮を使った紙漉き B4	
		トロロアオイ栽培、水やり観察、新製品の具体化	
		楮を使った紙漉き 30cm 四方、楮を使った紙漉き A3	
		柿渋塗布	
11		マスクケース製作	
		半年間の考察及び感想製作	
12		発表	
		楮を使った紙漉き A3	

	柿渋塗布 1年間のまとめ 展示、他講座見学	
--	-----------------------------	--

イ. 体験的・課題解決的な学習活動（生徒の活動の様子）

- ① トロロアオイ栽培では生徒各自1つのコンテナを用意し、自分の責任で栽培させた。小学校1年生の朝顔の栽培以来のものも多く、観察スケッチ等、毎回結構楽しそうに作業していた。
- ② 牛乳パックによる紙漉きでは、やはり座学より作業をしている時の生徒の生き生きした様子が印象的であった。はがき版は大きさが小さいので難易度としては簡単な部類であるが、2学期に行う本格的な紙漉きのリハーサルとしては上々であった。
- ③ 夏休みの和紙の新製品開発の課題では、いろいろ夏休み中にネットですすでにある和紙製品を検索して、各自新たなものを考えてくるように言ってあった。しかし、なかなか期待したほどには新たな発想が無かった。発表の中から、傘、バッグ、壁紙、入院患者のリストバンドの4つのグループに分けて共同開発を進めることにした。しかし、その後様々な問題が生じ、壁紙のみが残ることになった。さらに後から、マスクケースも試作した。
- ④ 実際の紙漉きでは版がはがき版からA4、B4、30cm四方、A3と大きくなるにしたがって難易度が増すので相当苦労していた。繊維が漉き桁や漉き簀にくっついて、なかなか剥がれないし、紙の厚さ加減も難しく一人前になるのに10年かかると言われていることが良くわかった。
- ⑤ マーブルリング、墨流しでは、美術的な感じではあったが、毎回異なる模様が出来て、生徒は、楽しそうに取り組んでいた。
- ⑥ 揉み紙づくり、柿渋塗布では、紙の表面加工として重要な過程であり今年の総学では紙漉きの次に重要なポイントであった。生徒たちも良く取り組んでくれたと思う。
- ⑦ マスクケース製作では今回全員共通課題として制作させた。各自が漉いた紙を柿渋塗布し折って糊付けして制作させ、表面には各自で絵を描かせた。
- ⑧ 壁紙制作では、グループ制作の1つとして抗菌脱臭効果を狙って、紙は柿渋塗布し2枚重ねで真ん中に竹炭に粉をサンドしたものを試作した。

ウ. 学習成果物

トロロアオイ



種



マーブリング



墨流し



揉み紙 (こんにゃくのり)



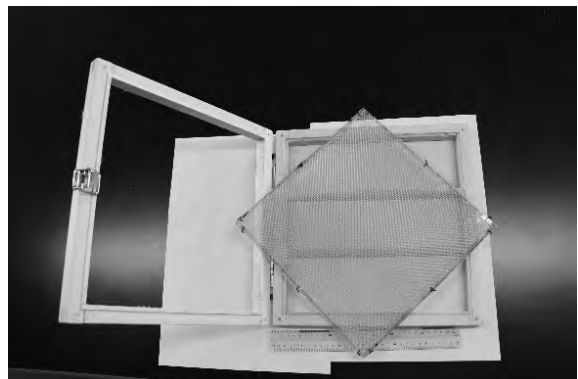
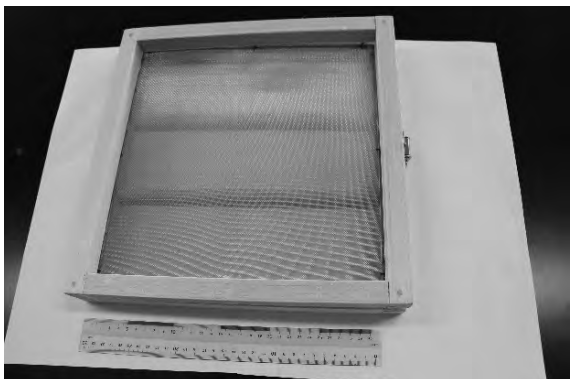
壁紙 (柿渋塗布した2枚の間に竹炭をサンド)



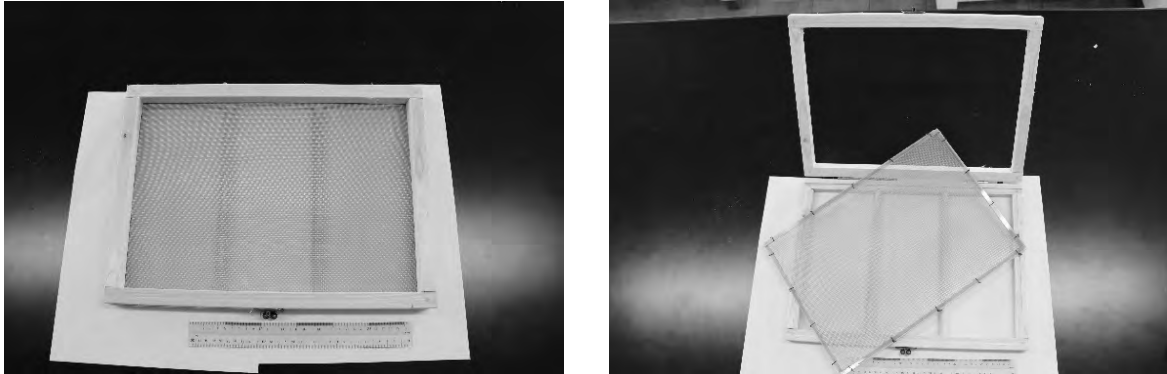
マスクケース



手づくり紙漉き道具 30cm×30cm



手づくり紙漉き道具 A3



(3) 分析と考察

- 今年にはコロナの影響で授業が1学期前半予定していた内容が出来なかった。予定では、ここで和紙センターでの研修と工芸会館に見学に行き和紙製品を考察するという大きな計画その①が無しになってしまった。このことがまず今年度思ったような結果や成果が出せなかった大きな原因の1つであろう。
- 計画その②として、トロロアオイを加えた紙漉きの水溶液の粘度測定を1つの大きな柱として考えていたが、粘度測定器購入がうまくいかなかったため、結局、数値的な粘度測定が出来なかった。
- 学校で紙を漉く必要から道具づくりから行う必要があった。一番手こずったのは漉き箕がないことで、これはステンレスメッシュで代用するなど試行錯誤して、何とか来年に向けて道具はできたと思う。

(4) 研究成果・次年度へ向けての課題

ア. 研究成果

今年度の大きな成果は、学校で漉けるサイズ（B4、A3、30cm 四方）の漉き桁と漉き箕の開発に成功したことで、これを使用して今後の製品開発に向けて学校で生徒が紙を漉いて、その紙を使った製品作りの可能性が開けた。

また、紙の加工としての、コンニャク糊を用いた揉み紙や柿渋塗布などが行え、ノウハウの収集ができたことも大きかった。

イ. 次年度へ向けての課題

- (ア) 学校で紙を漉くために、センターの方に来校していただき、学校の道具で紙を漉いてもらい、粘度を含め再現出来るデータを取得する。
- (イ) トロロアオイ栽培を引き続き行い、クレゾール無しの保存及び効果的な使用方法を開発する。
- (ウ) 新製品の模索検討と試作。
- (エ) 楮栽培をどうするか検討。

今回授業で扱った「ピッカリ千両節」は原曲ではなく、編曲したものである。生徒に演奏できる楽器を聞き、生徒に合わせて編曲をした（編曲は教員が行った）。演奏するだけでなく、我々が演奏した「ピッカリ千両節」に合わせて体育選択者が創作ダンスを踊るという、音楽と体育がコラボレーションする形で発表が行われた。

イ. 体験的・課題解決的な学習活動

練習風景



体育館で総学体育「健康と運動」選択者とのコラボレーション



課題解決的な学習活動として、人口減少対策の案を考えた。重要なのは、小川町の魅力を知ってもらうことであるとし、町の魅力を多くの人に知ってもらうためのイベントについてイメージした。内容については、以下（3）学習成果物にて。

ウ. 学習成果物

小川町の魅力を知ってもらうために、「ピッカリ千両節」を生かしたイベントについて意見を出し合った。

- ・小川高校の校庭で音楽イベント、盆踊り大会を行う。駅近くで人が集まりやすい。何も知らずに小川町駅を利用した人の目にも留まる。
- ・校庭の中心に演奏者が演奏する檣（やぐら）のようなものを建てる。

- ・小川町で営業している店が屋台を出して販売する。いろんな種類の料理が並ぶようにする。交通規制して、道路上に店を構えるのがいい。駅にも料理の香りが届き、人が集まるのではないかな。
- ・昼の部は、高校全生徒、町の小中の全生徒が櫓を囲み「ピッカリ千両」で踊る。踊りが終わったら出店の食べ物を楽しむことができる。これにより児童・生徒が小川町を知るきっかけになる。イベントが楽しいものになれば、町への愛着も出てくる。記憶にも残る。
- ・夜の部は大人向け。小川町はお酒が有名。日本酒、ワイン、ビールなど。やはり盆踊りタイムはある。盆踊りが好きな人はたくさんいるので、盆踊りを踊りたいという理由で遠方から来る人もいるはず。
- ・人が多く集まれば、注目される。町全体の小中高で盆踊りを踊るといのはなかなかないのではないかな。TV やネットでニュースになる⇒小川町の存在を知ってもらえる。小川町に魅力はある。知ってもらうためのきっかけが大切。
- ・和紙を使って、店の看板を作る。チラシを作る。照明関係にも和紙を使う。
- ・ピッカリ千両の歌詞に「絹の町」というのがある。絹を復活させ、衣装に使えるか。

(3) 分析と考察

授業前、生徒は小川町への関心が薄く、町について知らないことが多かった。興味関心も低かったようである。曲の練習を重ねていくうちに楽しくなってきた、それに比例して小川町への興味も湧いてきたということがアンケート結果からわかった。今後、小川町のイベントに積極的に参加したいという感想や、小川町への貢献のためボランティア活動も行いたいという感想も見られた。小川町にある曲は、小川町の魅力を凝縮したものであり、その曲を知ることによって町を知ることができるということが確認できた。知ることによって愛着も湧くようである。また、上記のように課題解決のための町のイベントについて想像を膨らませたが、想像することは出来ても実際に行くことは難しい。しかし、町の魅力を発信していく方法を考えることは大切なことであるし、意味はあったと思う。授業を選択した生徒の中には小川町出身の生徒もいて町のイベント開催に興味を持っていたので、今回考えたイベントをあたためて、いつか実現できたら嬉しい。

(4) 研究成果・次年度へ向けての課題

本来「音楽演奏研究」の授業は老人ホームで訪問演奏を行う予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響でできなくなってしまった。しかし、今年は体育とのコラボにより違った形で「おがわ学」を行うことができた。今回はたまたまギター、ベース、ドラム、キーボードが演奏できる生徒が揃っていたが、来年度授業を選択する生徒によってできる音楽が決まる。生徒の個性を理解し、持っている力を最大限に引き出すことを意識してやっていきたい。

小川町にある曲を知ること、町への関心を持つことができ、曲が町に与える影響や音楽に何ができるか課題解決方法を考えることはできた。これからは考えているだけでなく、考えたものを実行できるといい。そのためには学校だけでなく、町全体で取り組みができるようにするための仕組み作りも必要になってくる。高校の中だけで終わるのではなく、視野を広く持って、町の課題解決に実際に貢献できることを願う。

12 総合的な学習の時間「生活と美術」

総合的な学習の時間 (生活と美術)	受講生徒：3年生 32名	担当者：教諭 新井 三千夫
----------------------	--------------	---------------

(1) 授業のねらい

- ・日常生活において商品がどのような過程を経て私たちの手元に入るのかを考察する。
- ・デザインや色彩が生活に及ぼす影響を考えながら、表現力を向上させる。
- ・造形活動を体験しながら知識を総合的に働かせ、社会に出て役立つ創造力を伸ばす。
- ・職業に必要な慎重さや丁寧さを身に付け、探究心や向上心を養う。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

月	時数	内容	用意した物
8	1	新商品開発のプロセス	
	}	・和紙と小川町について	プリント
9	5	・経済や経営について、意見交換 ・ランプシェードについて意見交換	参考資料 ワークシート
10	6	演習①ランプシェード制作	作品見本
	}	・完成予想・コンセプト(制作意図)をまとめる	LED ライト
	25	・和紙の特性 ・用具の使い方 ・土台作り・成形	和紙、のり、ボンド 風船
11		・細部の仕上げ	針金、ペンチ 角材、厚紙
	26	演習②商品開発および改良	筆
	}	・作り手と使い手の立場の違いについて	パレット、小皿
	31	・設計図制作 ・取扱説明書を作成	ミシン糸
	32	総括 ・商品発表(プレゼンテーション)	水糸
	}	・意見交換	紙やすり
	39	・販売を想定した議論 ・授業の感想・今後の課題	水入れ
12		・展示の準備	A3 画用紙、A4 用紙 カラーペン

イ. 体験的・課題解決的な学習活動(生徒の活動の様子)

実際に商品を作ることで作る側(売る側)の視点だけでなく、使う側(買う側)の視点が変わり、より考え、工夫する態度がうかがえた。更に設計図や取扱説明書を制作したことで、自分の作業を振り返る良い機会となった。発表の機会や話し合う場面では、自分が何をどうすれば良いかを考えたり、確認したりして、他人の意見や作品を尊重する態度が見られた。



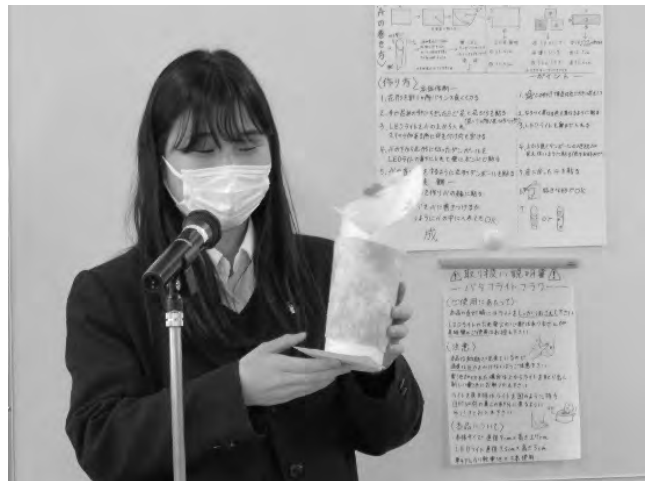
意見交換の様子



和紙の素材研究



制作途中の協議の様子

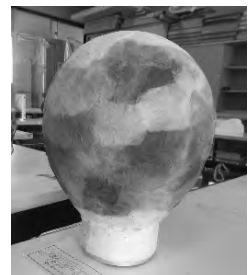


商品説明プレゼンテーションの一幕

学習成果物（ワークシートや写真など）



ランプシェードの通常時と点灯時

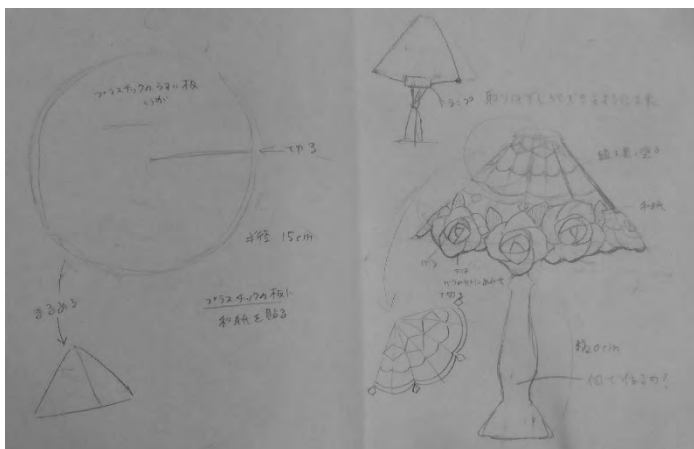


(3) 分析と考察

経済や経営、商業に関する知識はそれぞれが学問として成り立つほどの内容があり、商品開発

として絞ってはいるが、指導する立場でもその奥深さには改めて難しさを感じた。

生徒にとっても、商品開発における仕事の多さに気づき、知識を深め視野を広げる事が出来た。



演習①：ランプシェード制作

まずは地元小川町の伝統産業である和紙について考え、素材研究や何か魅力的な物が作れないか話し合い、ランプシェード制作に方向を定めた。

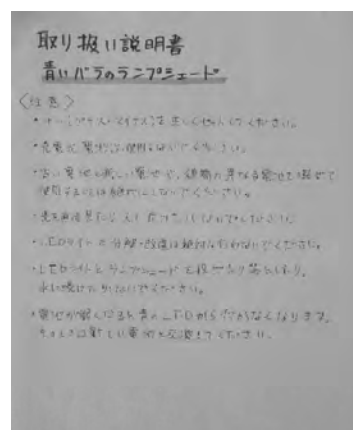
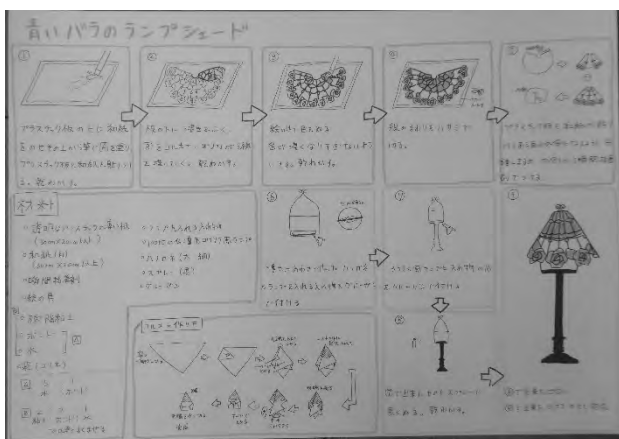
この段階で興味を持ち生徒が各自制作に取り組みだしたことは、大いに評価できる。



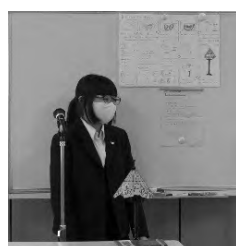
演習②：商品開発（制作）と改良

実際に完成予想を元に制作を始めてみると、問題点や疑問が見つかり、人に聞いたり調べたり部品を用意したりと、各自乗り越えて完成までこぎ着けた。

そこで設計図と取扱説明書という形で、制作を振り返りながらまとめさせた。



総括として最後に自作の商品をプレゼンテーションしたが、コンセプトは伝わるものの販売の観点からはまだ経験不足の感は否めない。



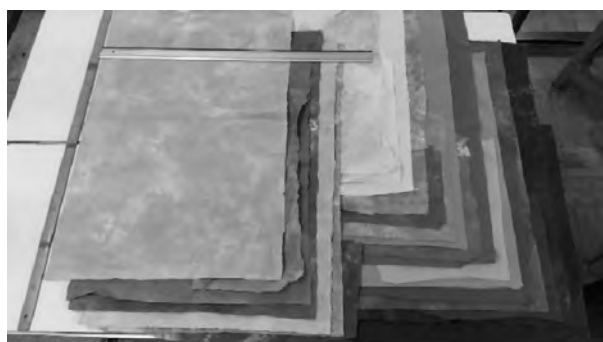
(4) 研究成果・次年度へ向けての課題

ア. 研究成果

ランプシェードの商品開発という絞った形にはなったが、生徒の自由な発想と創造力は評価に値する。生徒同士の会話の中で「これほしい。」「いくらで売ろうかな？」などと会話が生まれたり、LED ライトの美しい光に日本人が開発に関わりのあることや、地元小川町の和紙の素晴らしさを理解し、生活の中で心豊かに送ることの大切さが身についたことが成果といえよう。

イ. 次年度へ向けての課題

- (ア) 今年は時間数が多く確保できたが、活動内容を精査して期間内に終わるように計画を立てておく必要がある。
- (イ) 時間に余裕があれば、プレゼンテーションに商品説明パネル、映像を用意できれば更に良い。
- (ウ) 地元で実際に商品開発に携わる人の話を聞かせる機会の検討。
- (エ) 更に深く学ばせるために、値段を決めるための学習や、実際に販売する機会が作れないかなどを検討する。
- (オ) 和紙の素材は今回使用の物で良かったか検討する。



13 総合的な学習の時間「総合英語研究」

総合的な学習の時間 (総合英語研究)	受講生徒：3年生9名	担当者：教諭 谷野 浩人
-----------------------	------------	--------------

(1) 授業のねらい

動画を作ることによって小川町の新たな発見をし、さらに英語で発表することにより、英語での表現力や発表力をつける。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

- 1学期 SDGs を題材にしたテキストを使って、SDGs の基礎を学ぶ。
- 2学期 学んだ SDGs を基に小川町における SDGs について考える。

9月 インターネット等を使い小川について調べる。

10月 小川町役場政策推進課訪問。小川町のSDGsの取組について話を聞く。小川町駅周辺散策。聞いた話から実際に町中を歩き、SDGsの知識と現状を結びつける。

11月 動画制作開始。町中を歩いて映像にしたいものを撮影する。外国人向けのPR動画をテーマとする。

12月 動画編集作業。映像を並べるほか、伝わる英語のテロップやBGMも考える。完成。

3学期完成した映像を紹介する英語のスライドを作成。発表練習。発表。

イ. 体験的・課題解決的な学習活動



下調べ



町の政策推進課の方の話も聞きました。

小川町政策推進課訪問



町中散策（ロケハン）



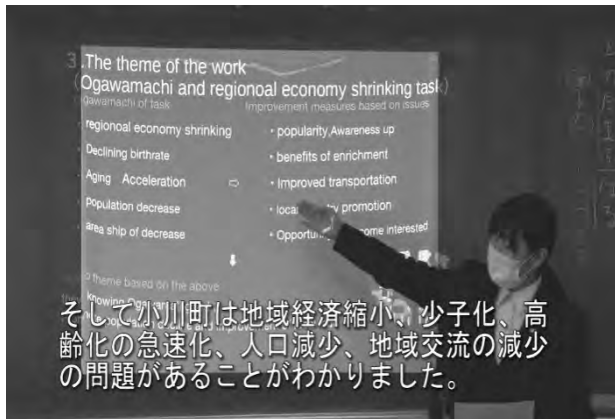
撮影





撮影データをもとに編集作業開始
英語の授業なので、英語のテロップも入れます

編集会議



そして小川町は地域経済縮小、少子化、高齢化の急速化、人口減少、地域交流の減少の問題があることがわかりました。



一番下の段には環境があり、その上に社会があり、一番上には経済があります。

できあがった映像のプレゼン

ウ. 学習成果物

9人を2グループに分け、それぞれで小川町 PR 映像を制作した。映像完成後のプレゼンは全員で1つのプレゼンを考えて発表とした。

生徒作品





プレゼン資料

小川町の良さをプレゼンしよう

総合英語研究A

1. Overview of Ogawa Town

area : 60.45km²
 population : 29,000人 Male: 14,400 Female: 14,600
 Number of households: 12,660 households

- Ogawa Town has been prosperous since ancient times and was called.

"Musashi's Little Kyoto"

20 Years of Ogawa Town

- ~Slow~
- ~Story~
- ~Sustainable~
- ~Safety~
- ~Small~

3. The theme of the work (Ogawamachi and regional economy shrinking task)

Ogawamachi of task Improvement measures based on issues

- regional economy shrinking
- Declining birthrate
- Aging Acceleration
- population decrease
- area ship of decrease
- popularity, Awareness up
- benefits of enrichment
- Improved transportation
- local industry promotion
- Opportunity to become interested

Video theme based on the above they knowing Ogawamachi good , Promote population decline and improvement of local industry

4. Outline of the work

Introduce the river and the traditional sake brewery of Ogawamachi.

"Tsukikawa" in Ogawamachi, which corresponds to "Slow" and "Sustainable" of OGAWA 6S, is a beautiful river that slowly flows through the town.

"Seiun Shuzo" in Ogawamachi, which corresponds to "Story" of OGAWA 6S, uses local spring water to make sake.

5. About sake brewing in Ogawa Town

It has a history of 100 years and is made of good quality water and rice.

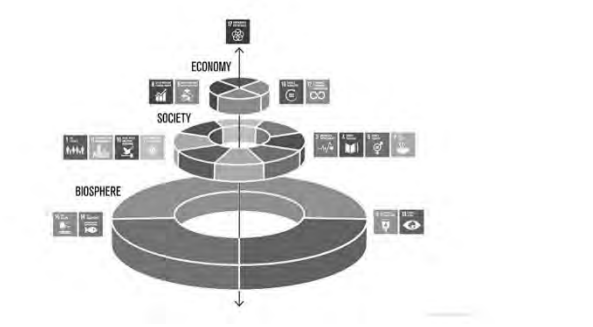
- Matsuoka Brewery
- Musashi Tsuru Sake Brewery
- Seiun Sake brewing

These three are famous

6. About the river (water) in Ogawa Town

~Overview of Tsukikawa~

- Arakawa river system flowing in western Saitama prefecture It is a first-class river
- It is the largest tributary of the Toki River.



(3) 分析と考察

授業前、SDGs の知識や小川町の関心はとても少ない状態であった。登校する生徒の小川町在住の割合が少ないこともあり、小川町駅から学校までの往復以外、町内を歩く機会が今までになかった生徒がほとんどである。

SDGs の知識を少し持ったところで、小川町の取り組みを調べていくうちに、新たな気づきがあり、町役場の SDGs 担当の方の話や現地視察をすることで、漠然とした関心がより深い興味に変わっていったようである。

映像に小川町のことや SDGs を取り上げるにあたって、どのようにすればメッセージが相手に

伝わるのか？映像の撮り方やナレーション、テロップ、BGM の入れ方などをグループ内で相談し作り上げていった。

（４）研究成果・次年度へ向けての課題

今回は映像制作という形で小川町を探究するという試みを行った。課題設定や課題を自分で解決することを考える過程において、「見る人」を意識した探求は人に伝えるという点において便利なツールのようなものである。ただ、誰もがビデオカメラなどの機材を扱え、使い方を指導できるわけではないので、映像に変わる「伝える授業」を考える必要があるかもしれない。

IV 研修会報告

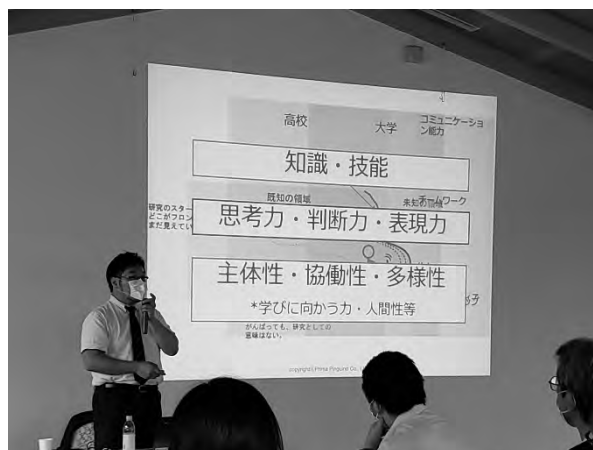
1 新たな学び場のデザインに向けての学校と地域との連携

講師：産業能率大学経営学部 藤岡慎二教授

会場：リリックおがわ会議室

日時：令和2年9月29日（火）

目的：学力の3要素、中高連携、高大接続改革、大学入試改革、アクティブ・ラーニング、主体的・対話的な深い学び、探究学習地域連携について、関連性を踏まえながら説明できるようにする。また、高大接続・新大学入試改革が進む昨今、進路指導や入試対策において、中高での探究学習や地域連携が有効であることを、他の教員にも的確に説明できるようにする。



内容：9月29日（火）、「新たな学び場のデザインに向けての学校と地域との連携～主体的・対話的な学びや探究学習の効果・意義・課題～」と題して、新たな学び場を設計する上で前提となる変化を把握するための研修会が行われた。前半では、講演という形式によって、社会の変化で変わる「求められる学力の3要素」、「高大接続改革」、「新大学入試改革」を理解した上で、中高での主体的な対話的な深い学びや探究学習・地域連携の有効性や必要性について理解して、探究学習や地域連携と教科指導・進路指導に親和性があることなどを確認した。また、後半では、参加者がジグソー法を実践しながら、課題に対する理解を深めた。具体的には、「地域と連携した探究学習の導入しようとしたが、信頼している同僚のベテラン先生から今まで通りの授業でよいと言われた場合、どのように説得するのか？」といった課題が提示されて、各グループで討論をした上で、それぞれの結論を持ち寄って全体で共有を図った。多忙な教育現場において、探究学習や地域連携を絵に描いた餅ではなく、実現したものとしていくために、如何なる方略が必要かという点を言語化するという意味でも、非常に有益な研修会となった。

2 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット

日 時：令和2年10月30日（金）

参加者：小川高校教員

目 的：学校と地域の連携・協働の在り方について情報交換及び協議を行うことで、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の取り組みの深化に資する。

内 容：「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミットが、ウェブ会議システム Zoom を使用して開催された。

前半には、学校と地域の連携・協働におけるポイントと課題について、パワーポイントを表示して、全体のテーマ設定に関する説明があった。学校と地域の協働において生じがちな課題として、①目標の評価とPDCAサイクル構築ができていない、②連携・協働を推進するコーディネータ人材が不足している、③学びを支える体制（コンソーシアム）が十分機能していない、という三点が示された。こうした実際的な三つの問題が、今回の全国サミットでの検討テーマである点が解説された。これらは、「おがわ学」の実践を進める上でも重要な問題であり、非常に意義のある情報であると感じられた。

後半には、課題別の分科会①・②・③に分かれて、それぞれ現場の高校による実践報告や意見交換などが行われた。分科会①は「PDCAサイクル構築による協働活動の推進」というテーマで、島根県立平田高等学校が報告を担当した。分科会②は「コーディネータ人材の配置・育成」というテーマで、長野県飯田OIDE長姫高等学校が報告を担当した。分科会③は「コンソーシアムによるコーディネータ機能の発揮」というテーマで、三重県立飯南高等学校が報告を担当した。小川高校は、分科会①として参加して、話題提供、質疑応答、情報交換、全体共有が行われた。

全国で同様の課題に取り組んでいる高校の実態を知ることができ、「おがわ学」の構築に当たっても示唆的な学びを得ることができた。

V 研究成果発表

1 埼玉県教育長視察

日 時：令和2年11月6日（金）

会 場：埼玉県立小川高等学校

内 容：11月6日（金）、教育長による「おがわ学」の視察が行われた。埼玉県教育委員会の高田直芳教育長が来校して、5～6限の時間に、3年生の総合的な学習の時間などを中心に、「おがわ学」の実践に取り組んでいる現場を視察した。総合社会研究では「小川街づくりプロジェクト」、総合英語研究Aでは「小川町のPR映像をつくろう!!」、くらしと科学では「細川紙とは何か」、日本文化研究では「万葉集と仙覚律師」といったテーマで、「おがわ学」の取組が行われており、生徒が自身の調査結果を発表したり、実演に取り組んだりしている様子を見学していった。また、授業の見学が一通り終了した後は、今年度の「おがわ学」の取組状況などについて、活発な意見交換が行われた。



総合社会研究



総合英語研究A



くらしと科学



日本文化研究

2 文部科学省視察

日 時：令和2年11月19日（木）

会 場：埼玉県立小川高等学校



文部科学省視察

内 容：11月19日（木）、文部科学省による「おがわ学」の視察が行われた。文部科学省から5名が来校されて、午前中は高校2年の世界史「紙の歴史と和紙」を見学された。この授業では、最初に和紙作家の方を招いて、和紙の魅力について講演していただいた。次に、その内容を踏まえて、生徒たちが和紙の未来について考えて、自分の意見を発表していった。また、午後には、小川高校・小川町・埼玉県の関係者が参加して、意見交換会が行われた。カリキュラム開発や新型コロナウイルス感染症の対応などについて、貴重な意見をいただくことができた。

3 埼玉県知事訪問

日 時：令和2年12月22日（火）

会 場：埼玉県立小川高等学校

内 容：12月22日（火）、埼玉県知事による「おがわ学」の視察が行われた。大野元裕知事が来校して、学校と地域が連携・協働して、教育の魅力化を推進する「おがわ学」の現場を視察した。「おがわ学」の開発に取り組んでいる関係者から、地域との連携による「おがわ学」の構築や実践に関する概要や現状などについて説明があった。また、高校1～3年生の代表生徒が、「おがわ学」を実際に体験した感想や、探究学習で得られた経験、今後の進路への活かし方などについて、パワーポイントを用いてプレゼンテーションをした。さらに、「おがわ学」や地域の将来的な展望なども含めて意見交換が行われた。



埼玉県知事訪問

4 おがわ学フォーラム

日 時：令和3年1月29日（金）

会 場：埼玉県立小川高等学校・リリックおがわ他

目 的：「おがわ学」では、小川町内の小・中・高等学校の児童生徒が、小川町の文化や歴史、産業などについて理解を深めて、地域活動への参画や地域課題の解決に取り組む能力を育むことを目的として、令和元年度から「おがわ学」の探究活動を続けてきた。二年目となる令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、計画の大幅な変更を余儀なくされたが、それでも様々な実践の全体像が見えてきた段階で、これまでの成果を一般の方々に広く公開するため、「おがわ学フォーラム～研究開発発表会～」と題するイベントを開催した。

おがわ学の取組
埼玉県立小川高等学校及び小川町立小・中学校の児童生徒が、小川町の地域資源を題材として、地域の歴史や文化、産業等について知り、段階的に学びを深めていながら、地域活動への参画などを行ってまいります。おがわ学を通じ、子供たちの小川町へ対する愛着や誇り、地域課題の解決に取り組む能力を育むことを目的とするとともに、おがわ学に関わる大人自身の学びにも繋げていくことを目指しています。令和元年度から構想を凝らしており、県や町、授業の団体や地域の方々が力を合わせて取り組んでいます。

フォーラム概要
これまでのおがわ学の取組の成果について広くお知らせするために開催いたします。学生・生徒、教職員の方々のほか、地域の皆さまのご参加をお待ちしております！

※プログラム

午後1時00分～ 研究開発発表会 おがわ学の概要説明のほか、授業実践の紹介を行います。

午後1時55分～ トークセッション おがわ学に関わる方々（児童生徒やその保護者、関係者）に協力いただいた地域の方等をゲストに迎え、授業実践を通じた感想や意見を発信します。

午後3時10分～ 研究協議・意見交換会 小川町の中学生や小・中学校、高校、大学の先生方も含め、フォーラムの参加者同士による意見交換を行います。参加方法については、研究協議（4～5人でのグループ協議）または意見交換会（大人数での意見交換）から選択いただけます。 ※意見交換会では、チャットを通じた参加や懇話のみの参加も可能です。参加申込方法については裏面をご覧ください。



内 容：1月29日（金）午後、ウェブ会議システム Zoom を使用して、「おがわ学」フォーラムが開催された。第1部の研究開発発表会では、「おがわ学」の概要説明のほか、小・中学校、高等学校の関係者から、それぞれの校種別に授業実践の紹介が行われた。第2部のトークセッションでは、具体的に「おがわ学」に関わる児童生徒や保護者、地域の方々をゲストに迎えて、授業実践を通じた感想や意見などを聞いた。第3部の研究協議・意見交換会では、小川高校や小中学校、大学の先生方を交えて、「おがわ学」の未来について意見が交わされた。研究協議は4～5人でのグループ協議で、意見交換会は大人数での意見交換として実施された。小川町の小学校・中学校・高校を含めた「おがわ学」の全体像を発表することで、二年間の歩みを総括して、集大成の三年目に向けた節目となる発表会となった。

5 「おがわ学」生徒作品展

日 時：令和3年2月2日（火）～2月7日（日）

会 場：小川町立図書館 地下町民ギャラリー

内 容：2月2日（火）～7日（金）、小川町立図書館の地下町民ギャラリーで、「おがわ学」に関する生徒作品の展示が行われた。3年生が総合的な学習の時間で制作した作品を中心に、「おがわ学」の授業によって創作された成果の一部を展示した。また、小川町内の小学生・中学生の作品も同時に展示された。「おがわ学」を縁とする児童生徒の学びの成長を広く発信して、一般の方々に知っていただく機会となった。



「おがわ学」生徒作品展

VI 成果と課題

1 本年度の成果

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響がある中、計画を柔軟に変更しながら、継続的に『おがわ学』の構築・実践を進めることができた。また、授業公開・研究協議会として予定していた発表会も、オンラインによる「おがわ学フォーラム～研究開発発表会～」として実施するとともに、「おがわ学」のテキストおよびリーフレットについても完成できたことは大きな成果である。

これまで小川町に関する学びは、各学校または各教員の独自の取組として行われてきたが、小中高の連携した体系的な学びとして構築を進めることができた。そして、「おがわ学」の授業づくりに当たり、学校と地域が連携協働し、学習指導要領（小学校は令和2年度全面実施、中学校は令和3年度、高校令和4年度と全面実施）における「社会に開かれた教育課程」の実現に資する取組の推進を図ることができた。

2 次年度の課題

地域学である「おがわ学」を「探究的な学習」へとステージアップさせるために、探究のプロセスである①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現を生徒自身に踏ませていくことが課題である。また、新型コロナウイルス感染症の拡大によって前倒しされた「GIGA スクール構想」による高速大容量通信ネットワークシステムを積極的に活用して、より有機的に「おがわ学」と「探究的な学習」を関連づけていくことも大きな課題である。これらの課題を乗り越えていくためには、概念としての「おがわ学」「探究的な学習」「GIGA スクール構想」について、校内はもとより、コンソーシアムなどでも共有し、教職員や関係者を対象とした不断の情報共有の場が必要である。そのためにも、校内、校外を問わず、研修会やフォーラムといった行事を開催していくことが重要である。

令和3年度は、「おがわ学」と「探究的な学習」、そして「GIGA スクール構想」を有機的に関連づけながら、「おがわ学」の狙いである「児童・生徒が、小川町の自然、歴史・文化、産業などを学んでいく中で知識や技能を身に付けるとともに、小川町を窓にして世界を見ることで身の回りで起きていることと世界の出来事を関連付けて考えたり、これからの社会を思い描いたり、将来どのような人生を歩んでいこうかを考えるきっかけとなること」、「小川町の豊富な教育資源である人、物や情報を活用して、より実社会や実生活の複雑な文脈とのつながりを持った『真正の学び』を目指しながら、多様な人々との係わりや協働を通して、児童・生徒の情緒がより豊かになり、他者と互いを尊敬し合える関係を築ける人へと成長すること」を達成できるよう、小・中学校、高校や町、地域の方々が連携協働して、更なる「おがわ学」の構築・実践を進めていきたい。

令和元年度指定
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」
(地域魅力化型)
令和2年度 研究開発実施報告書【第2年次】
令和3年(2021)3月31日発行
埼玉県立小川高等学校
〒355-0328 埼玉県比企郡小川町大字大塚 1105
TEL 0493-72-1158 FAX 0493-71-1045
<https://ogawa-h.spec.ed.jp/>